

CULTURE AND LANGUAGE, No. 80

В.В.Кожин
**『19世紀ロシア抒情詩論
(スタイルとジャンルの発展)』
翻訳の試み(4)-1**

**Опыт Перевода книги В.В.Кожина
«Книга о русской лирической поэзии
19 века (Развитие стиля и жанра)»
(М., «Современник», 1978)
на японский язык (4)-1**

鈴木 淳一

СУДЗУКИ Дзюнъити

今回はワザーム・ワレリアーノヴィチ・コージノフの『19世紀ロシア抒情詩論(スタイルとジャンルの発展)』の第3章「プシキン詩の時代」を訳出しましたが(「文化と言語」79号、27-129頁)、今回はそれに引き続き、第4章「プシキン以後。チュッチェフとその一派」の前半を訳出してみたいと思います。

前回同様、上付き数字は原注を表し、原注は脚注として訳しました。また訳注は[]に入れて本文中に埋め込むか、あるいは上付き数字前に「注」をつけて表し、章末にまとめることにしました。

原文の括弧、ゴチック、イタリックは、それぞれ括弧、ゴチック、傍点にしています。

4章(前半)

プウシキン以後。チュツチェフとその一派

После Пушкина. Тютчев и его школа

プウシキン時代のポエジーは、とりわけ抒情詩は疑いもなく、文学全体において、いやもっと広く文化全体において、主導的にして支配的な役割を担っていた。ところがプウシキンが死ぬとポエジーは、とくに抒情詩は、文学界ではもちろんのこと生活自体の中でも、急激な勢いで立場を失い、その地位を叙述的な散文へ譲渡してしまう。20年後の1850年代中葉になってやっと、抒情詩は舞台前面へ再登場することになるのだが、そのことについては次章で語ることにしよう。

レールモントフの心に染み入るような抒情詩の圧倒的な影響でさえも(彼の詩集が出版されたのは1840年)、東の間のことでしかなかった。彼の死はほとんどポエジー全般の終焉であるかのように受け取られたのであった…

だが実際は、ロシア抒情詩は——いわばひっそりとではあったにしても——プウシキン時代以後も発展し続けていたのであり、ここで証明を試みたいのは、その事実に他ならない。芸術現象はいつでも同時代人の直接的で強力な反響に巡り合えるわけではまったくない。たとえば、何らかの理由で、創作後数十年して、あるいは数百年も経ってから、やっと多少とも広域の共有財産となった無数の偉大な芸術作品のことを想起してみてもかまわない。だが、これ以上脇道に逸れるのは止めておこう。輝かしく明瞭な一例、すなわちボラティンスキーの円熟した抒情詩が辿った運命に焦点を合わせるだけで十分である¹。最後の詩集『たそがれ Сумерки』(1842)の中に多かれ少なかれ十全に展開された彼の円熟した抒情詩は、プウシキン時代後の抒情詩を巡るこの章の話題と直截的で密接な関係を持っているからである。

¹ しばしば見られる「ボラティンスキー-Баратынский」という綴りは、偶然の産物である(それは、我がロシア語に固有の「アーカニエ аканье」の所産である)。詳細は拙論「ボラティンスキーの生活上の功績 Жизненный подвиг Боратынского」(«Русская литература», 1975, №2)を参照されたい。

確たる統一性を備えた『たそがれ』におけるボラトインスキーは、これ以上はないほどの円熟と深遠とに到達しており、この最後の詩集はまさに抒情詩の傑作と呼ばれるに相応しい。だが、この詩集の真価が認められたのはやっと 20 世紀に入ってからのことには過ぎず、いまようやく広く世間に認知されようとしているのである。

このことは奇妙この上ないと言わざるを得ない。ボラトインスキーはいつでもその名を知られていたばかりか、著名でさえあったからである。彼の最高傑作はさながら封印されていたかのようなのではないか。こうした経緯の一部は、彼の名声、彼がプシキン直近の盟友として文壇に登場した青年時代に由来している、という事実によって説明がつく。当時彼の作品は、万人の口の端にのぼっていた。しかし、1842 年に『たそがれ』が出版されたとき、この詩集は、ある同時代人の回想によれば、「亡霊のような印象——その亡霊の正体も、その亡霊の望みも理解できかねて、ただ驚き当惑する人々の間に出現した幽霊のような印象——を与えた… произвела впечатление приведения, явившегося среди удивленных и недоумевающих лиц, не умевших дать себе отчета в том, какая эта тень и чего она хочет...」²のであった。

非常に示唆的なのは、後年になっても多少とも世間に広く知られたボラトインスキー作品が、青年時代初期にすでに彼に名声をもたらしていた諸作——『別れ Разлука』（「私たちは別れた。一瞬、ほんの一瞬だった… Расстались мы; на миг очарованьем...」）、『幻滅 Разверение』（「汝、徒に我を誑かすなかれ… Не искушай меня без нужды...」）、『滝 Водопад』（「懸崖の高みからさんざめき落下するがいい… Шуми, шуми с крутой вершины...」）、『髑髏 Череп』（「鬼籍の友よ！ 君の眠りを妨げたのは誰？ Усопший брат! кто сон твой возмутил?...」）等々——だったということである^{注1}。彼の円熟したポエジーは概して、20 世紀に至るまで理解されなかったし、ある意味では現代に至るまで理解されていないのである。

² «Русский архив», 1867, №2, с.262.

今日、教養人なら誰にとっても、ボラトインスキーの傑作群が、ロシア詩というものの存続する限り、悠々と生き続けるであろうことは明白であり、1900年当時絶大な影響力を持っていた文学研究者モロゾフの手になる、詩人生誕100周年を記念する祝賀(!)論文の中の一節は、なんだか奇妙とすら言えるような響きを放っている——「現代においてボラトインスキーの提示する関心は、ほとんど専ら歴史的なものに過ぎない В наше время Боратынский представляет интерес почти исключительно исторический」³…

ボラトインスキーは当今やっと、本当の意味での幅広い読者層の注目を初めて浴びることになった一連の古典作家の仲間入りを果たしたのである。もっとも彼は、言うまでもなく、もっとも理解困難な詩人の一人でもあるのだが。

周知のように、ボラトインスキーは「思想の詩人 поэт мысли」である。だが彼の抒情詩は、たとえば(同じく「思想の詩人」と呼ばれる)チュッチェフの作品とは本質的にまったく異なっている。チュッチェフの作品では概して、思想が多面的で全的な体験のイメージの中に編み込まれ、定着されているのに対し、ボラトインスキーの場合は思索がしばしば「純粋な」形で、とはつまり思索そのものに固有の形式で現れるからである。したがって大抵の読者はかつて、彼の作品はあまりに理性的、あまりに抽象的であって、有機的な生命力に欠けている、とみなしたし、現今ですらそうみなしているのである。ボラトインスキーを高く評価していたトゥルゲーネフでさえも、こう述べている——「ボラトインスキーは唯一無二にして真の意味での、つまりプシキンの意味での詩人ではない Боратынский не поэт в единственном, истинном, в пушкинском смысле」(ちなみに、プシキン自身はまったく異なった意見を持っていたことを想起しておこう)。

これはまったく正鵠を射ていないように思われる。ボラトインスキーの円熟したポエジーには活き活きとした生が具現化されているからだ。ただしそれは、思想そのもの——抽象的思想とさえ言い得るような思想そのものの

³ Морозов П.О. Е.А.Боратынский. «Образование», 1901, №3, с.126.

——生き活きとした生、つまり思想そのものの有機的な自己運動でしかないのだが。

詩人は自らの特異性を、自ら選んだ創造の道の未曾有の困難さを知悉していた。彼は、明らかに自作を念頭におきながら、こう書いている——

すべては思想、思想に尽きる！ 惨めな言葉の芸術家よ！
おお、思想の神官よ！ 汝に忘却は無縁なり。
すべてがここにある。人間があり、世界があり、
死があり、生があり、そして剥き身の真理もここにある。
彫刻刀にオルガン、絵筆！ それらに心魅せられ、
それらの規矩を越えようとしぬ者は幸せなり！
祝祭日ともなればその者たちは陶醉の真っ只中！
だが、思想よ、鋭利な光よ！ 汝を前に地上の生は、
抜き身の剣を頭上に吊るされたかのように蒼褪めている。
[1840年?]

Всё мысль да мысль! Художник бедный слова!
О жрец ее! Тебе забвенья нет,
Всё тут да тут и человек, и свет,
И смерть, и жизнь, и правда без покрова.
Резец, орган, кисть! Счастлив, кто влеком
К ним чувственным, за грань их не ступая!
Есть хмель ему на празднике мирском!
Но пред тобой, как пред нагим мечом,
Мысль, острый луч! бледнеет жизнь земная.

そうなのだ、ボラトィンスキーの多くの詩作品では、まるで思想が世界を余す所なく呑み込もうとしているかのようであり、そこに再現されているの

は「地上の生」ではなく、生によって生み出される思想の運動なのである。ボラトインスキーは、そうした創作課題を説明するかのよう、こう書いている——「ロシア人には思考するための特別な才能と特別な必要性がある Русские имеют особенную способность и особенную нужду мыслить」⁴。ここで想起してもらいたいのは、これが書かれたのが愛智会の活動裡でのことであり、始まったばかりのスラヴ派と西欧派の論争において新たなロシア哲学が誕生した時代においてのことだった、ということである。さらにもう一つ、注目すべき考察がある。それは、彼が詩作品には「思惟の気高い道德性 высокая моральность мышления」を証明すべき使命がある、と指摘していることである。

ボラトインスキーのポエジーには実際、たんに「抽象的な」思想の運動だけではなく、その思想の道德的な意義もまた具現されているし、さらに言い募れば、思想の美までもが具現されている。換言すれば、読者の眼前には思想の生が、すなわちつねに倫理的な内実と美学的な内実を備えた生が提示されているということである。しかし、この思想の詩的な生を余す所なく知覚し、咀嚼吸収するのは、並大抵のことではない。読者はまずは何をさておき自らの裡に、彼の詩作品から善と美の力を感じ得る、深化された包括的な思考力を開拓しなくてはならない。さもなければ読者は、ボラトインスキーのポエジーに固有のこうした特質を看取し、評価することなどできないだろうし、彼のポエジーは読者の前に異常なほど理性的にして抽象的、かつ無味乾燥なものとして姿を現すことになるだろう⁵。

1829年にすでに詩人の親友イワン・キレエフスキーはこう指摘していた——「ボラトインスキーの豎琴のあらゆるニュアンスをすべて聞き分けるには、他の詩人に対するよりもずっと繊細な聴力とずっと大きな注意力を持たなくてはならない。読者は彼を読み込めば読み込むほどに、そこに一見しては気づきようのない新しさを続々と発見することになるが、それは自らの存在中

⁴ Боратынский Е.А. Стихотворения. Поэмы. Проза. Письма. М., «ГИХЛ», 1951, с.351.

⁵ これ以上詳細なボラトインスキーの抒情詩に関する分析は、拙著『詩作品はどう書かれるか Как пишут стихи』59-70頁[1章4節]を参照のこと。[拙訳も参照されたい(「文化と言語」、45号、1996年10月、109-126頁)]

に凝縮されたポエジーの確かな指標なのである。Чтобы дослышать все оттенки лиры Боратынского, надобно иметь и тоньше слух, и больше внимания, нежели для других поэтов. Чем более читаем его, тем более открываем в нем нового, не замеченного с первого взгляда, – верный признак поэзии, сомкнутой в собственной бытии⁶。

ボラトインスキーの読者の誰でもが、彼の抒情詩の複雑にして豊穡な意味を全面的に理解しているわけではまったくない。単刀直入に言うておかなければならないのは、現在でもなおボラトインスキーという名の魅力は、真の意味で無限の力を獲得したプシキンという名の魅力に多くを負っているという事実である。我々の意識においてボラトインスキーはプシキンと分かち難く結びつけられているのである。

しかし、真摯この上ない読者はすでに、ボラトインスキーの円熟した詩作品は完全に自立的存在であり、プシキンのポエジーとはほとんどまったく共通性がないこと、そして彼の遺産に備わる第1級の価値は彼のポエジーの深遠な独自性によってもたらされていることを、はっきりと理解しているのだ。

ボラトインスキーの後期作品には、ちょうどチュッチェフ作品におけると同様、プシキンの創作の場合とは異なつた芸術的發展段階が刻印されている。プシキンのポエジーがルネサンス的本性を持っているとしたら、ボラトインスキーの円熟した抒情詩は、ルネサンス芸術に全面的に取って代わろうとするバロック芸術の本性を具現化した作品として定義づけることができるかもしれない。バロックとは、存在の悲劇的なまでの矛盾を暴き立てる芸術であり、不安な緊張と凄まじい対比、複雑な形態とメタフォリカルな象徴性の芸術である。たとえば、『群衆に不安な昼は親しくとも… Толпе тревожный день приветен…』、『死 Смерть』、『何故に在る、月日よ！… На что вы, дни!..』、『未熟児 Недоносок』、『韻 Рифма』、『秋 Осень』等々に見られるような、円熟したボラトインスキーが作り出す詩的世界は、プシキンの詩的世界とは根本的に異なっている^{注2}。

⁶ Киреевский И.В. Полное собрание сочинений в 2-х томах, т.2, с.53. [該当個所見当たらず]

どんな比較も相対的なものだが、それでもプウシキンをシェークスピアになぞらえるとすれば、ボラトィンスキーの創作は、その抒情詩集の露訳がつい最近出版されたばかりのシェークスピアの若き同時代人にして悲劇的パロックの大詩人、ジョン・ダンに比較してみることができよう(ジョン・ダンは、ヘミングウェイがかの有名な長篇『誰のために鐘は鳴る』のエピグラフとして採用した非凡な思弁によって、多くの人々に知られている)^{註3}。

ボラトィンスキーの詩作品では、創作そのものが人生の悲劇の光芒を呼び起こす力として姿を現す――

私は、歌の女神よ、汝等を愛す。
だが汝等の魅惑的な来臨、
その靈感の甘い躍動――それは
人生の不幸の前触れなのだ。

カメナたちの愛とフォルトゥナの敵意――
それは表裏一体。私は黙そう！
弦上に下された指がふとした弾みに、
胎内に我が運命を眠らせるペルーンを
目覚めさせては困るから。

そして私は、胸に苦しみを溢れさせつつ、
私に優しいムーサから離れ去る。
そして私は言う、音たちよ、また明日、
今日の日の静々と消え去るべし、と^{註4}。

[1844年]

Люблю я вас, богини пенья,
Но ваш чарующий наход,

Сей сладкий трепет вдохновенья, –
Предтечей жизненных невзгод.

Любовь камен с враждой Фортуны –
Одно. Молчу! Боюсь я,
Чтоб персты, падшие на струны,
Не пробудили вдруг перуны,
В которых спит судьба моя.

И отрываюсь, полный муки,
От музы, ласковой ко мне.
И говорю: до завтра, звуки,
Пусть день угаснет в тишине.

ちょっと前までボラトインスキーのポエジーは、先述したように、プーシキンのポエジーを基準にして「測定されていた」ために、その本質の理解と評価が阻害されてきた。ボラトインスキーの創作魂はひたすら未来を志向していたのであり(ブロークの卓抜した指摘によれば、ボラトインスキーは「その孤独な苦悩と探求において同時代を追い越してしまった опередивший свой век в одиноких мучениях и исканиях」詩人である)、プーシキンの創出した調和の取れた全一性という基準の境界線を打破しようとしていた、たとえ自らを「思想のポエジー поэзия мысли」として結晶化させるという一事によってであったにせよ、とにかく打破しようとしていたのである。こうした姿勢は一面性とある程度の不調和へと帰結することになったが、それ以外の方法ではプーシキン以後の文学の前向きな発展は不可能であったろう。

ボラトインスキーの創作が何にもまして準備したのは、ドストエフスキーの芸術が創造されるための芸術的土壌である。このことについては近年のボラトインスキーに関する研究書の中で再三再四言及されている。バフチンが

明らかにしたところによれば、ドストエフスキーの創作においては思想が、^{ムイスリ}理念が「芸術的描写の^{イデア}対象」となっており、ドストエフスキー自身は偉大な理念の^{イデア}芸術家となった *становится предметом художественного изображения, а сам Достоевский стал великим художником идеи* [注——引用文中のイタリックは原文では分かち書き]なのである⁷。しかし、ある意味においてはボラトインスキーこそはまさしく、ロシアで始めて出現した「理念の芸術家 *художник идеи*」たちの一人に他ならない。と同時に彼はまた、そのあからさまに悲劇的な世界感覚という点で、ドストエフスキーの近親者でもあるのだ。

次のような詩人の心に染み透るようなフレーズは、謙抑と我侔とが分かち難く絡まり合ったドストエフスキーの芸術世界に対する一種のエピグラフとして捧げることもできるだろう^{注5}——

不穏な夢想は宥めすかすか、忘却しよう、
我等は理性的な奴隷、おとなしく
自らの望みと天運とを折り合わせよう——
さすれば我等が運命は幸福にして平安であろう。
狂人よ！ あの方ではないか、至高の意志ではないか、
我等に情念を与えしは？ その声ではないか、我等が
情念の声の中に聞くのは？ おお、我らにとって生は、
胸中で怒涛のように逆巻きながらも、運命によって
狭い場所へ閉じ込められた生は、重荷でしかない。

[1833年]

Мятежные мечты смирим иль позабудем,
Рабы разумные, послушно согласим
Свои желания со жребием своим –
И будет счастлива, спокойна наша доля.

⁷ Бахтин М.М. Проблемы поэтики Достоевского. М., «Советский писатель», 1963, с.151.

Безумец! не она ль, не вышняя ли воля
Дарует страсти нам? и не ее ли глас
В их гласе слышим мы? О, тягостна для нас
Жизнь, в сердце бьющая могучею волною
И в грани узкие втеснённая судьбою.

一考すべきは、今日ボラトインスキーのポエジーに高い関心が払われている理由の一つとして、彼のポエジーと現在注目の渦中にあるドストエフスキー芸術との内面的な近似性が真っ先に挙げられるという点である。

ボラトインスキー研究書の多くが、詩人の一目瞭然たるペシミズムについて言及してきた。このことについては現在でもしばしば繰り返し指摘されている。だが実際には彼の創作は、ドストエフスキーの創作と同様に、ペシミズムからも、皮相的なオプティミズムからも遥かに遠く隔たったものである。彼の創作はまさしく掛け値なしに悲劇的であるが、真の悲劇はつねに破滅的本性のみならず、破滅的本性の克服をも内包するものである。ボラトインスキーのもっとも「陰鬱な」詩作品でも、そこには彼の力強い思想が——彼自身の言葉にしたがえば、善も美も兼ね備えた「鋭い光 *острый луч*」が——脈打ち、凱歌の声を挙げているのである。彼の一連の詩作品が見せる外見的な「出口なし状態」は、理念に対する情無用の「強度」実験として理解されるべきである(同様の事情はドストエフスキーの創作にも当て嵌まる)。この詩人の場合、その絶望においてさえ無気力や戦意喪失など存在しないのだ。詩人はいつでも何恐れることなく、毅然と未来へ視線を投げ掛けているのである。

1843 年末、その死の数ヶ月前、ボラトインスキーは生涯初めて旅立った外国の地から、次のような手紙を書いている——「あけましておめでとう、親愛なる友人諸君… 皆さんの未来に幸多からんことを。我が国の未来たるや、他のどこにもまして雄大なものなのですから Поздравляю вас, любезные друзья,

с новым годом... Поздравляю вас с будущим, ибо у нас его больше, чем где-либо」⁸。

* * * * *

ボラトィンスキーと肩を並べて屹立しているのはチュツチェフである。しかし、チュツチェフの抒情詩——それはいわばまったく別な範疇の属する現象である。チュツチェフは世界の大抒情詩人の一人である。世界から選りすぐった抒情詩の大家の輪をどんなに狭めようと、どんなに制限しようとも、チュツチェフがこの輪の外へ取り残されることなどあり得ない。

アフナーシー・フェートは、チュツチェフの抒情詩を「我が国の(つまり全ロシアの)崇高特許状 наш патент на благородство」であると宣言し、次のように説明している^{注6}——

これこそ我が国の崇高特許状、それを
詩人は我らに手渡してくれるのだ。
そこには力強い魂の王国があり、
そこには繊細な生の花が咲いている。

Вот наш патент на благородство, —
Его вручает нам поэт;
Здесь духа мощного господство,
Здесь утончённой жизни цвет.

これは実に的確で信頼に足る定義である。チュツチェフの傑作詩群においては、力強さと繊細さといった決して両立し得るとは思えないような性質が、有機的に融合されているのである。この点において彼に比肩できる詩人など、

⁸ Боратынский Е.А. Там же, с.351.

ロシアの抒情詩界にはもちろん、筆者の知る限りでは世界の抒情詩界にも、一人としていない。

チュッチェフの作品の大部分は通常、哲学的抒情詩に分類されている。この定義づけが適切であることは論を待たない。チュッチェフの詩作品の多くは、「哲学的な」性格を帯びた思想を——世界の矛盾対立一般についての思想、存在の全一性についての思想、自然と人間の不可分性についての思想を——内包しているからである。

しかし、ここでしっかりと認識しておくべきは、「哲学性」とはいわばテーマであって、チュッチェフ抒情詩の本質そのものではないということである。チュッチェフの詩作品から一定の思想を抽出することを自らの課題とみなしている人は、彼のポエジーの真価を知覚してもいなければ、理解してもいないのだ。彼らは、俗に言う、「木を見て森を見ない」人々なのである。

哲学的思想がチュッチェフのポエジーにおいて果たしている役割とは、風景、あるいは生活実相のようなものである。それは、厳密に言えば、詩的現実を創り出すための素材に過ぎない。思想それ自体にはいかなる芸術的価値もない。もっとも、詩作品の中に投入された思想がその作品にとって不可分、かつ不可欠な要素となっていることに異論の余地はないのだが⁹。

もしも思想が自立的な価値を持っているとしたら、チュッチェフの疑うべくもなく「哲学的」抒情詩は、「風景的」抒情詩、「恋愛的」抒情詩よりも遥かにずっと意義深いものであろう。ところが、彼の傑作詩群には、思想が思想固有の形式を伴って存在しない作品が少なくない(たとえば、『雪嶺 Снежные горы』、『なぜにお前は、柳よ、その頭頂を水面へ垂れ… Что ты клонишь над водами…』、『夏の嵐の雄叫びは何と楽しげなことか… Как весел грохот летних бурь…』、あるいは『1837年12月1日 1-е декабря 1837』、『その人は終日人事不省のまま横たわり… Весь день она лежала в забытьи…』、『1864年8月4日の命日前夜 Накануне годовщины 4 августа 1864 г.』といった作品を参照されたい^{注7})。

⁹ この点については、後にフェートの抒情詩との関連で詳論する。

肝心なのは思想ではなく、チュッチェフによって創造された詩的現実——彼の精神の比類なき力強さ、それに彼の精神生活のこれまた比類なき繊細さの双方が刻印された詩的現実——なのだ。チュッチェフのポエジーは宇宙の無辺性も、個人的体験のほとんど捉え難い機微もその手中に収めることができるのである。しかもときとしてそれら双方を、同じ一つの抒情的イメージの中に表現するのである^{注8}——

灰青色の影たちが交錯し合い、
色彩は褪せ、音響は消えてしまった——
生も活動も融け去ってしまった、
揺らめく薄明の中へ、遠いどよめきの中へと…
眼に見えぬ蛾の羽音が
夜の大気に響きわたる…
えも言われぬ倦怠の一時！
すべては私の中に、私はすべての中にある！…

Тени сизые смешались,
Цвет поблёкнул, звук уснул –
Жизнь, движение разрешились
В сумрак зыбкий, в дальний гул…
Мотылька полёт незримый
Слышен в воздухе ночном…
Час тоски невыразимой!..
Всё во мне, и я во всём!..

わざわざ断るまでもないことだが、ここでは作品の内容が、その生きた息遣いと慄きのすべてを伴った一つの存在として出現している、あるいはより正

確に言うならば、詩人の精神活動、心的活動の詩的言語によって表象された他在として顕現しているのである。

我々読者はチュッチェフの抒情詩において、人間がどうにかしてやっと到達できるかもしれない、こうした極限状況をありありと実感することができる。彼の詩作品には、我々読者の心に美的快樂はもちろんのこと、ドストエフスキーが次のように語った衝撃すらも呼び起こす能力が備わっているのである——「…もしかすると、そのように深く至高の美を感受したときには、そのように深く神経を揺さぶられたときには、人間内部で何か本質的な変化が生じることさえあるのかもしれない …может быть даже, при таких ощущениях высшей красоты, при этом сотрясении нерв, в человеке происходит какая-нибудь внутренняя перемена」^{注9}。

だが、チュッチェフの抒情詩を消化吸收する道程——それは非常に長く複雑な道程である。1854年に出版された彼の処女詩集に対する書評の一つでは、チュッチェフのもっとも美しく特徴的な詩行について、「明らかに不合理であり、不可能であり、非現実的なもの」として語られている。概して——間違える可能性にとくに怖気づくこともなく——こう断言して差し支えなかり。チュッチェフの抒情詩の偉大さの本当の振幅を(あるいはむしろその偉大さの無辺性を)認識できたのは、ほんの数人の同時代人だけだった、と。そうした同時代人の中で真っ先にその名を挙げるべきは、トルストイである。彼は、チュッチェフの抒情詩をプシキンのそれ以上に高く評価しかねない勢いであった。しかし、たとえばゴンチャロフのような芸術家は、チュッチェフの「抒情的パトスの尋常ならざる力強さ」を認めながらも、それでもなおかつ彼を本質的に一本立ちできない詩人、『懸崖 Обрыв』の主人公ライスキーのようなディレッタントとみなしたのであった。

チュッチェフが偉大な詩人として、あるいはもっとも偉大な詩人として、その真価を認められ出したのは、やっと20世紀に入ってからのことに過ぎない。その真価の広範な認知ということになれば、それはやっここ数年の出来事なのである。

チュッチェフ抒情詩の法外なほどに豊かで複雑な意味を、いくばくかの簡単な考察によって評定することなど、到底不可能と言うしかない。ましてや、1820年代から30年代にかけての作品と1850年代から1870年代にかけての作品とは、本質的にまったく異なっていることを考えれば、それはなおさらである。チュッチェフ作品を品定めするためには、丸々一冊の書物が必要となるだろう。

1820年代から30年代の抒情詩の場合、前景に押し出されているのは人間と自然(語のもっとも幅広く、宇宙的な意味での自然)との対立葛藤、悲劇的とさえいえるような対立葛藤である。チュッチェフは古代の世界観の諸特徴を一部蘇らせようとするが、と同時に彼のポエジーにはまた、最高度に発達した主権者としての個人が——その存在自体が全世界である個人、古代文化の知らなかった個人が——姿を見せている。彼の抒情詩には自然——まるごとの自然、森羅万象の生起する自然——が魂を宿した生きた存在として、ということつまり人間の血縁者として現れるが、人間は決して自然と結合することも、融合することもできない。なぜなら自然との結合合体は、人間の「破滅」を、人間の原初的なカオスへの「融解」を意味してしまいかねないからである。ここで、もっとも特徴的にして美しい作品の一つ、『夜の風よ、何故にお前は泣き叫んでいるのか?… О чём ты воешь, ветер ночной?..』を見てみよう注¹⁰——

おお！ 歌ってはならない、そんな恐ろしい歌は、
古代のカオス、肉親たるカオスについての歌は！
夜の霊界は、ほら、貪るように
お気に入りの物語に耳を敬っている！
夜の霊界は死んだ胸を切り裂き跳び出して、
無辺との合体を狂おしく求めている！…
おお！ 寝静まった嵐を目覚めさせてはならない——
嵐の足下にはカオスが蠢いているのだから！…

О! страшных песен сих не пой
 Про древний хаос, про родимый!
 Как жадно мир души ночной
 Внимает повести любимой!
 Из смертной рвётся он груди,
 Он с беспредельным жаждёт слиться!..
 О, бурь заснувших не буди –
 Под ними хаос шевелится!..

チュツチェフはまた同時に初期の作品で、その無際限の広がりや壮大さにおいて宇宙にも匹敵する人間のイメージを確立しようとしている。彼は、人間的個性の裡に(古代的な語義での)潜在的な神性を定立しようとしているのである。彼の抒情詩では人間と詩人が、神々の「対談者」として登場する。チュツチェフは人間的生の至高の発現を、人間的生が、「たとえ瞬時ではあれ *хотя на миг*」、「神の統べる全世界的な生 *жизни божеско-всемирной*」と一体化することの中に^{注11}、「私は、神さながら、創造の高嶺を歩んでいた *по высям творенья, как бог, я шагал*」ことの中に^{注12}、見出そうとしているのである。個々の詩的宣言など、何一つ本質を語るものではない。チュツチェフの初期ポエジーのパトスとトーンのすべては、まさしく宇宙的な生への一体化という点に係っているのである。これは彼の「自然について」歌った作品のみならず、「歴史的な」性格を持った作品(『*Кикеро Цицеро*』、『*Наполеон Наполеон*』、『*Колумб Колумб*』等々)にも、そしてさらには激烈ですべてを呑み込んでしまうような情熱の息づく初期の恋愛抒情詩にも固有の事実なのである^{注13}。

1840年代の(より正確には1848年までの)チュツチェフは非常に寡作であった。この時期、彼の創作活動にある種の中断が訪れたことは明らかである。やがて彼は詩作を再開するが、再開後の作品はそれまでの作品とは本質的に異なった響きを立て始める。そこには人間性と民族性という特質がより鮮明

に打ち出されてくるからである(もっとも宇宙的パトス、全世界的なパトスが捨て去られてしまうわけではまったくない)。このことはすでに 1849 年から 50 年にかけて書かれた、『人間の涙よ、おお、人間の涙よ… Слёзы людские, о слёзы людские...』や『ロシア女性へ Русской женщине』、『神よ、慰めをお送りあれ… Пошли, господь, свою отраду...』といった作品にはっきりと読み取ることができる^{注14}。

チュッチェフ後期の作品では、1820 年から 40 年代のポエジーに特有の一種のオリンポスの要素が抑制されている(だからといって、後期の作品がよりすぐれているということではない。ただたんに両者は別物だということである)。この意味で注目すべきは、ブローク最愛のチュッチェフ作品『二つの声 Два голоса』(1850)である。この作品はこう締め括られている^{注15}——

オリンポスの神々には羨望の眼差しで
不撓不屈の人間同士が闘うさまを眺めさせておくがいい。
闘いのすえに斃れし者、宿命だけに破れ去りし者とは、
神々の手から勝利の花冠を奪取した者に他ならない。

Пускай олимпийцы завистливым оком,
Глядят на борьбу непреклонных сердец.
Кто, ратуя, пал, побежденный лишь Роком,
Тот вырвал из рук их победный венец.

新たな特徴の数々がくっきりと姿を見せるのは、1840 年代と 50 年代の狭間に始まるエレナ・デニーシエワとの悲劇的な恋愛に直結した一連の作品においてである。詩人の伝記作者たちはこれまでのところ、チュッチェフの人生において途轍もなく大きな意味を持つこの恋愛の始まりが、詩人の創作の新たな時代の開始、より正確には詩人の創作の新たな最盛期の開始に一致している、という事実注意到を払ってこなかった。だが、詩人最後の恋愛には

抜き差しならぬ必然性があったことは明らかである。この最後の恋は、世界の恋愛抒情詩の絶品中の絶品に属す「抒情的ロマン」が芽吹き、育ち、花開くための土壌を提供したのである。

* * * * *

1911年ブリューソフはチュツチェフについてこう書いている——「…彼の詩行は途轍もなく自立的であり、独自のである。チュツチェフには彼独自の創作方法と詩作法があるが、それらは彼が生きた19世紀初頭にあつては完全に独立孤高のものであつた…Его стих крайне самостоятелен, своеобразен. У Тютчева совершенно свои приёмы творчества и приёмы стиха, которые в его время, в начале 19 века, стояли вполне особняком」¹⁰。さらに続けてこう言っている——「チュツチェフには真の後継者がいなかった。ただ一人フェートの名を挙げることができるばかりだが、フェートはチュツチェフの直接的な影響を受けずに成長したのだった。やっと19世紀も末になってチュツチェフは真の追随者たちを見出すに至つたのである… У Тютчева не было настоящих преемников, можно назвать лишь одного Фета, который, впрочем, развился без его непосредственного влияния. Только в конце 19 века нашлись у Тютчева истинные последователи…」¹¹。真の追随者とはもちろん、ブリューソフ自身とポエジーにおける彼の盟友たちのことである。こうしたチュツチェフ観は当時、ほとんど普遍的なものであつた。たとえばゴルンフェリトは、こう主張している——「チュツチェフに対して歴史的な観点を適用するのは難しい。彼はどうかして歴史的な観点を滑り抜け、母国文学の運命との相関関係においてというよりはむしろ、彼の複雑な創作と興味深い人格の総合的全体性において理解されたいと望んでいるのである Трудно принять историческую точку зрения на Тютчева. Он как-то ускользает от исторического воззрения и хочет быть

¹⁰ Брюсов В. Избранные сочинения в 2-х томах, т.2. М., «Гослитиздат», 1955, с.222.

¹¹ Там же, с.224.

понят не столько в взаимодействии с судьбами родной литературы, сколько в цельности его сложного творчества и интересной личности」¹²。ゴルンフェルトによって敷かれた道は、当然のことながら理に叶った、実り豊かな道である。しかし彼は、「歴史的観点」を排除しようとしなければいか、さらには「歴史的観点」に取って代わるべき方法を提示できていないのである。

ブラゴイーは「非歴史的な」チュッチェフ観に反対し、「チュッチェフとヴァーゼムスキー Тютчев и Вяземский」と題した論文（「1916-1928年」という日付が打たれ、1933年に公表された）で次のように書いている——「チュッチェフと同時代文学との結びつき、彼と直接的な類縁関係にある詩人たちや詩的環境との結びつきについては、まったく研究されてこなかった。しかも、大部分の研究者はア・プリオリにチュッチェフの途轍もない独自性を主張するだけで、そうした結びつきが存在する可能性そのものを否定しがちである。[原文改行]だが実際には、そうした結びつきは非常に重要、かつ多面的なものなのである。Связи Тютчева с его литературной современностью, с непосредственным поэтическим соседством и окружением не изучались вовсе. Мало того, а priori утверждая крайнюю самобытность Тютчева, большинство исследователей было склонно самую самую возможность существования таких связей отрицать. / На самом деле эти связи весьма значительны и многообразны」¹³。

ブラゴイーは同じ論文で、その長い詩作活動の様々な局面においてチュッチェフとヴァーゼムスキーの創作がいかに深く、多面的に結びついていたかを、説得的に解明してくれている。

1926年にはトニャーノフの論文「プウシキンとチュッチェフ Пушкин и Тютчев」が発表された。そこではブラゴイーに勝るとも劣らぬほど説得的に、チュッチェフと1820年代から30年代にかけて活躍した一連の詩人たち、すなわちグリンカ、シェヴィリョーフ、さらにはよりマイナーなライーチ、オズ

¹² Горнфельд А.Г. О русских писателях, т.1. Пб., 1912, с.3-4.

¹³ Благод Д. Три века. Из истории русской поэзии 18, 19 и 20 веков. М., «Советская литература», 1933, с.236.

ノビーシン、ノーロフ、ロツチェフ等々との関係が明らかにされている(この論文については後にまた触れることになる)注¹⁶。

その後に発表された研究書の多くは、若きチュツチェフと愛智会の詩人たち、すなわちヴェネヴィチーノフ、シェヴィリョーフ、ホミャコーフとの緊密な関係について言及している注¹⁷。実を言えば、初めてこの問題が提起されたのは、150年ほど前のイワン・キレエフスキーの論文「1829年度のロシア文学概観 *Обзорение русской словесности за 1829-й год*」に於いてのことである。キレエフスキーはそこで、チュツチェフをシェヴィリョーフやホミャコーフともども(ヴェネヴィチーノフは当時すでに他界していた)、「ドイツ派 *немецкая школа*」¹⁴のもっとも注目すべき詩人として列挙している。しかも、ここで言う「ドイツ」とは何よりも、これらの詩人たちの作品に備わった「哲学的」性格を意味していたのであった。

最後に、言い逃すわけにいかないのは、チュツチェフの創作はしばしばプシキン以前のポエジーと関連づけられたという点である。いわば彼は、プシキン以前のポエジーの伝統にプシキン死後も忠実であり続けた、ということである。ところで、このことについてはブリューソフが先に挙げた論文で、すでにこう言っていた——「彼の初期の詩作品はジュコフスキーの影響、それに一部デルジャーヴィンの影響を受けている *В ранних его стихах есть влияние Жуковского и отчасти Державина*」¹⁵。後年この観点を論理的に徹底して推し進めたのがトィニャーノフで、彼はチュツチェフを「*擬古典主義者*」——プシキンの頭越しに18世紀から19世紀初頭のロシア詩に範を求め、それを足掛かりに「革新者たち」の集うプシキン派と「格闘し」さえした「*擬古典主義者*」——として定義づけたのだった。

こうした様々な見解の当否を問うことは、今しばらく控えるとしよう。ただ一点だけ、どうしても指摘しておかなくてはならないことがある。チュツチェフはいまや、我々の理解では、「完全に独立孤高の存在」ではないし、「歴

¹⁴ *Киреевский И.В.* Полное собрание сочинений, т.2. СПб., 1911, с.25.

¹⁵ *Брюсов В.* Там же, с.222.

史的観点を滑り抜けて」もないということである。彼は、それがどういう形にせよ、彼以前のポエジーと同時代のポエジーにしっかりと「その根を下している」のである。

確かに、ときとしてこうした観点を掘り崩すかのような考えが前面に迫り出してくることもある。というのも、チュッチェフは 1822 年の半ばから外国に滞在し、ロシアに戻ってくるのはやっと 1844 年のことだからである。したがって、もしも祖国の詩的模索と彼の創作の間になにがしかの繋がりを指摘できるとしても、その繋がりはせいぜい呼応関係程度のこと、発展の相似関係程度のことに過ぎず、直接的であからさまな関係ではなかった、というわけなのである。

この結論は根本的に誤っていると思われる。チュッチェフの外国生活に関する情報は、概して微々たるものである。それでも信頼に足るある種の事実は、正しくそれらを評価するなら、多くのことを教えてくれる。第一に、チュッチェフは 3 度——毎回数ヶ月ずつ——ロシアへ里帰りしている。1825 年、1830 年、1837 年のことである。彼の天才的な慧眼にとって、祖国の精神的な動向と本来的な意味での文学動向の本質を把握するためには、同郷の人々や書物との短期間の出会いだけでも十分だったに違いない。

第二に、彼は異郷の地で同郷人と何度も接触している。しかも彼を訪れた人々の多くは、愛智会のメンバーであった。イワンとピョートルのキレエフスキー兄弟、メリグウノフ、チトーフ、シェヴィリョーフ、ロジャーリン、スヴェルペーエフなどである^{注18}。

第三に、チュッチェフは、彼の一連の書簡から明らかなように、丹念にロシアの新刊書に目を通していた(H.Φ.パヴロフの中編について論じた 1836 年 7 月 7 日付けの И.С.ガガーリン宛書簡を参照のこと)^{注19}。

そして最後に、これから言及する数字の大きさを想起すべきであろう。チュッチェフは外国滞在中、ロシア語雑誌 8 誌とロシア語作品集 9 誌に 100 篇前後の詩作品を発表しているのだ。この事実一つ取ってみるだけでも、彼と祖

国の文学活動との結びつきがいかに広く、緊密なものだったか、ということが分かるであろう。

ピョートル・キレエフスキーがドイツから祖国へ宛てた書簡(1830年1月)の中に見られる次の記述は特徴的である——「どうかマクシーモヴィチ(当時作品集「明けの明星 Денница」を出版しようとして準備中だった——コージノフ)に、チュツチェフが作品集のために小品を7つほど提供する約束をしてくれたとお伝えください Скажите Максимовичу, что Тютчев обещает дать пьес 7 для альманаха」¹⁶。この走り書きのような記述は、チュツチェフとロシア文壇との(少なくとも愛智会メンバーとの)結びつきが活気に溢れ、恒久的なものだったことをはっきりと示してくれている。そこにはチュツチェフの約束について、あたかもそれが当然のこと、自然なこととして語られているのだから。

上述したことから考えるならば、我々はただたんに非常に多くの事実を知らないだけなのであり、その結果としてチュツチェフと1820年代から30年代にかけてのロシア文学との「断絶」を巡る意見が醸成され得たに過ぎない、と結論づけないわけにはゆくまい。とりわけ前提し難いのは、チュツチェフが自分の作品が発表されもし、とにもかくにも当時のロシア詩の動向が反映されてもいた多数の雑誌や作品集を、たとえその一部分にしても目にしていなかった、という事実である。

以上を踏まえるならば、トィニャーノフの説に全面的に賛同できるだろう。彼は前述の論文で、若きチュツチェフを1820年代末頃にロシア詩において生まれた新しい思潮の直接的な参加者として捉えているからである。

トィニャーノフは、1827年にライーチとオズノビーシンによって刊行された作品集「北方の堅琴 Северная лира」の存在を強調し、この作品集において「初めてポエジーの新思潮が明確な輪郭を伴ってその正体を現した впервые с достаточной ясностью и определенностью заявило о себе новое поэтическое направление」¹⁷と指摘している。この作品集でチュツチェフとともに主導的役割を果

¹⁶ «Русский архив», 1905, кн.2, с.131.

¹⁷ Тынянов Ю.Н. Пушкин и его современники. М., «Наука», 1969, с.168.

たしたのは、ヴェネヴィチーフ、シェヴィリョーフ、ライーチ、オズノビーシン、ノーロフであった。

トニャーノフは新思潮を解説するにあたり、その創始者をフョードル・グリーンカ(1786-1880)だとしている。彼の主張はこうである——「1820年代後半に小さな形式の領域を押し広げるような巨大なイメージへの関心が再燃した。グリーンカに対する興味が異常な盛り上がりを見せる… グリーンカのポエジーは重要な文学現象の一つとなってゆく。グリーンカのアレゴリーが人々を魅了したのは、そのイメージの豊かさに他ならない… プレトニョーフはグリーンカのアレゴリーについて次のように書いている——『グリーンカは読者に何らかの詩的感覚を描き出してみせようとするとき、その感覚をある面でその感覚と似通った別な対象の名称で呼ぶ。彼は読者に、彼の比喩を追跡する喜びを与えるのである… 彼の世界はひたすら人間一辺倒であり、他にあるものはと言えば思想と感覚だけである』。ここにはすでに『イメージ』の綱領が、新しい記述的で象徴的なポエジーの綱領が顔を覗かせている во второй половине 1820-х годов шло оживление интереса к образу грандиозному, раздвигающему диапазон маленькой формы. Пробуждается необыкновенный интерес к Глинке... Поэзия Ф.Глинки становится одним из важных литературных явлений. Его аллегории привлекают именно своей образностью... Плетнев пишет об аллегориях Глинки: «Глинка, изображая вам какое-нибудь поэтическое чувство, называет его именем другого предмета, который похож на него в некотором отношении. Он доставляет вам удовольствие следовать за его сравнением... Его мир есть только человек, а все прочнее – мысли и чувствования». Здесь уже намечена программа «образа», программа новой описательной *символической поэзии*」¹⁸。[注——引用文中のイタリックは原文では分かち書き]

トニャーノフが引用しているプレトニョーフの論文は、1825年に発表されている。1827年にはチトーフが(ちなみに彼はミュンヘンにチュッチェフを訪ねていた)、愛智会の機関誌「モスクワ報知 Московский вестник」においてグ

¹⁸ Там же, с.169-170.

リンカのポエジーを高く評価している。さらに、1830年にはプッシュキンが、それ以前には歯牙にもかけていなかったグリンカについて、意味深長な発言をしている——「もしかしたらグリンカは、我が国の全詩人中もっとも独創的な詩人かもしれない *Изо всех наших поэтов Ф.Н.Глинка, может быть, самый оригинальный*」¹⁹。

この「もっとも独創的」という定義づけは、是非とも強調しておかなくてはならない。それは本質的に、我々の眼前にいるのが独自の流派的な詩人だ、ということも意味しているからである。この流派を代表する他の詩人たちは未だ十分な成熟を遂げておらず、ためにプッシュキンはこの流派の創始者の名前を強調していると考えられるのである。

同じ1830年にライーチはこう書いている——「グリンカは、我が国の詩人中の少数派に属す詩人である。彼のムーサは独特な衣装を纏い、独特な言語を話す。立ち居振る舞い奇矯にして輪郭不鮮明なこのムーサは、模倣の道行きを潔しとせず、孤高の道を切り開いたのである *Ф.Н.Глинка принадлежит весьма к малому числу наших поэтов. Его муза облекается в особенную одежду, говорит языком особенным, и, своенравная в своих поступках, безотчетливая, она не следует ходу подражания, но проложила себе дорогу отдельную*」²⁰。ライーチもまた、グリンカが「属す」「我が国の詩人中の少数派」の正体を定かにしていないが、いずれにしても彼は、この少数派をジュコフスキーの「軽快さ *легкость*」、プッシュキンの「漸進性 *постепенность*」から切り離している。だが、ここで言及されているのが独自の思潮のことであり、ライーチが間違いなくその思潮に共感していることは明らかである。

トイニャーノフの考えによれば、チュッチェフのポエジーもまたこの新思潮の軌道に沿って形成されていったことになる。

¹⁹ *Пушкин А. С. Полное собрание сочинений в 10-ти томах, т.7. М., Издательство АН СССР, 1958, с.119.* [1830年の「文学新聞」10号に無署名で発表された、グリンカの物語詩『カレリア』に関する批評「カレリア、あるいはマルファ・イオアンノワ・ロマノワの幽閉 Карелия, или заточение Марфы Иоанновны Романовой」からの引用]

²⁰ *«Отечественные записки», 1830, №5, с.255-256.*

「チュッチェフのイメージ群は… グリンカ作品(1830年)のそこかしこに見え隠れしていた——

夜露に生気をもらえなかった大地は
干からび、全身炎に包まれている。
西空は赤い縞模様をなして
炭のようにひっそりと朽ちてゆく。
…夕陽に身を焦がす岸辺の頭上では
空に反射した川が倒れ込んだ…

…詩的シンボルへと転化された、自然哲学体系の『二重性』が共通の特徴であった… シェヴィリョーフの『夢』(1827年)と比較してみよう——

二つの煌々たる太陽が昇ってゆく、
琥珀の炎を発する濃紫のマントを纏って…
二つの太陽が水面に照り映え、
二つの心が自然の懷で鼓動する——
血は二重の泉となって
神の被造物の血管を迸り、
二重の世界は一瞬の裡に
二つの瞬間を生きる。
私の胸は二分された心で
二重の呼吸をしていた——
そして半開きの両の目に
二重の昼の光は耐え難かった。

Образы Тютчева... мелькали у Глинки (1830):

Неосвеженная росую
Земля засохла, вся в огне,
И запад красной полосую
Как уголь тлеет в тишине.
...И над сожженными берегами
Упало зеркало реки...

...«Двоичность» построения натурфилософии, обращенная в поэтические символы, была общей чертой... Ср. «Сон» Шевырева (1827):

Два солнца всходят лучезарных
В порфирах огненно-янтарных...
Два солнца отражают воды,
Два сердца бьют в груди природы –
И кровь ключом двойным течет
По жилам Божьего творенья,
И мир удвоенный живет
В едином миге два мгновенья.
И сердцем грудь полуразбитым
Дышала вдвое у меня, –
И двум очам полузакрытым
Тяжел был свет двойного дня]²¹。

實際のところ、こうした類の「チュツチェフ的」な連や行は、グリンカやシェヴィリョーフ、ホミャコーフの作品にいくらでも見つけることができる。

1820年代末から30年代にかけてのポエジーにおける「チュツチェフ的」な(ここでは暫定的にこの定義を使わせてもらうことにしよう)思潮という問題を

²¹ Тынянов, там же, с.187-188.

初めて提起したトィニャーノフの論文は、この意味ではいくら強調してもし切れぬほど重要な意義を持っている。彼はさらにまた、よりマイナーだが、勝るとも劣らぬくらい特徴的な詩人の名前もあれこれと列挙し、ライーチやオズノビーシン、ロッツェフ等々といった詩人とチュツチェフの近接性を明るみに出したのだった。実際のところ問題なのは、一つのまとまりを持った詩的潮流のことなのである。

* * * * *

トィニャーノフの論文に続いて陸続と、この事実上忘却されてしまった詩的潮流を専門的に取り上げ、委細を尽くした論文が発表されてしかるべきだった——そう前提したくなるのは当然の成り行きである。しかし、そうはならなかった。その原因の一部は、トィニャーノフの論文自体の中に潜んでいる。

何にも増して多くの人々を当惑させたのは、新たな流派の誕生の必然性そのものに対する純「オポヤス的な」解釈である。トィニャーノフは終始一貫して、「チュツチェフ的な」思潮への移行をプシキン流ポエジーの——彼の言葉借りれば、「自動化してしまい автоматизировалась」、「感応すること ощущаться」を止めてしまったプシキン流ポエジーの——「テーマ、およびスタイルの革新 тематическое и стилистическое обновление」に対する必要性によって説明しようとしているのである²²。

第二に、文学研究者たちの主たる関心を惹きつけたのは、トィニャーノフの構想の基盤をなす、チュツチェフとプシキンの著しい対立関係という考え方であった。プシキンに有名なコメントがある——「キレエフスキー氏はドイツ派の若い詩人たちの中から、シェヴィリョーフ、ホミャコーフ、チュツチェフの3人について言及している。前2者に本物の才能があることは疑いない Из молодых поэтов немецкой школы г. Киреевский упоминает о Шевыреве,

²² См. там же, например, с.168-169, 171, 172.

Хомякове и Тютчеве. Истинный талант двух первых неоспорим」²³。トイニャーノフはこのコメントを、プウシキンは「チュツチェフに本物の才能があることを断固否定している *прямо отказывает в истинном таланте Тютчеву*」と解釈したのであった²³。1836年、プウシキンが編集する「同時代人」の3号と4号に(しかも3号では最初の数頁に)チュツチェフの詩作品が24編掲載されたが、トイニャーノフはそのことを事実上まったくの偶発事とみなしている。その理由は、彼の意見によれば、「チュツチェフの詩作品は、プウシキンが注視するとともに、文学前進運動の動力源として期待していたポエジーの領域に入ってこなかった… 結局のところ、当時の『同時代人』にはあらゆる詩作品が収録されていた、しかも3流の詩作品でさえも収録されていたのである *тютчевские стихи не входили в круг поэзии, к которому Пушкин присматривался, на которую он возлагал надежды в поступательном ходе литературы... наконец, в «Современник» к тому времени принимался всякий, притом третьеразрядный стиховой материал*」ということになる²⁴。

この主張に断固として反旗を翻し、論争を挑んだのが、チュルコーフ(Г.И.Чулков, 1879-1939)、ギッピウス(В.В.Гиппиус, 1890-1942)、ピガリョーフ(К.В.Пигарев, 1911-1984)といった碩学たちであった²⁵。それにもかかわらず、トイニャーノフの観点は現在でも支持者を持っている。最近リヂヤ・ギンズブルクは、トイニャーノフの立場に共感を示しつつ、こう書いている——「文学的なプロセスは、闘争と脇道への逸脱運動である。チュツチェフは『擬古典主義者』としてプウシキンと格闘したが、プウシキンは新米詩人を喜んで歓迎すべき根柢を持っていなかった *Литературный процесс есть борьба и движение вкось. Тютчев как «архаист» боролся с Пушкиным, и Пушкин не имел оснований восторженно приветствовать нового поэта*」²⁶。

²³ Там же, с.176, 177.

²⁴ Там же, с.179.

²⁵ См. «Звенья», т.2. М.-Л., 1933, с.255-267; *Тютчев Ф.И.* Полное собрание стихотворений. Л., «Советский писатель», 1939, с.8; *Пигарев К.* Жизнь и творчество Тютчева. М., Издательство АН СССР, 1962, с.84-89.

²⁶ *Юрий Тынянов.* Писатель и ученый. Воспоминания, размышления, встречи. М., «Молодая

二人の偉大な抒情詩人の相関関係——これは極めて重要な問題であり、是が非でもその本質を見極めてみなければならない。

問題がトイニャーノフの論文で示されたものよりも遥かに複雑であることは、おそらく間違いない。何よりもまず、プシキンが「チュツチェフに本物の才能があることを断固否定している」との説には、どうしても賛同しかねる。プシキンの論文「明けの明星」が書かれたのは1830年1月である。この時期までに発表されたチュツチェフの詩作品は全部で23篇だが、そのうち7篇は二十歳前後に書かれた、真にチュツチェフ的とはみなし難い若書きの作品である。また残り16篇中の7篇は翻訳か翻案であり(しかも、これらもまた若気の至りの作品で、詩人の円熟した翻訳には備わっている、あの力強さが欠如している)、また3篇は「即興詩」に過ぎない。注意すべきは、これらの作品のどれ一つとして詩人の生前に出版された詩集には収録されていないという事実である。

したがってプシキンは、チュツチェフの才能について自説を開陳しなければならなかった時期までに、詩人の「本物の」詩作品をたったの6篇しか知ることができなかったことになる。6篇とは『閃光 Проблеск』、『春の雷雨 Весенняя гроза』、『ナポレオンの墓 Могила Наполеона』、『シレンチウム! Silentium!』、『夏の宵 Летний вечер』、それに『幻影 Видение』である^{注21}。最初の『閃光』は1826年に作品集「ウラニア Ура́ния」に、それ以外の5篇は1829年に週刊誌「ガラティア Гала́тея」の5冊の異なった号(3、8、17、24、34号)に掲載されている。

プシキンは、自ら「ウラニア」に数篇のエピグラムを發表しているので、『閃光』を読んでいただろうことは容易に察しがつく。しかし、プシキンが「ガラティア」の各号に注意深く目を通していたことを確言するとなると、大いに躊躇せざるを得ない。もっとも彼は、彼に敵対的なこの雑誌の批評に関心を示し、雑誌の編集者ライーチと論争までしていることもまた事実であるが。

гвардия», 1966, с.101.

ここには、実を言えば、議論すべきことなど何もない。なぜなら、たとえばチュツチェフを個人的に知っていたイワン・キレエフスキーが「ガラティア」に発表された詩人の作品に「気づかなかった」ことは、周知の事実だからである。キレエフスキーは、プシキンがそれに応答した論文「1829年のロシア文学概観 Рбозрение русской словесности за 1829год」の中で、こう言っている——「ドイツ派の詩人たちの間で特筆すべき名は、シェヴィリョーフ、ホミャコーフ、それにチュツチェフである。だが、チュツチェフは昨年たった1編の作品しか公表していない Между поэтами Немецкой школы отличаются имена Шевырева, Хомякова и Тютчева. Последний, однако же, напечатал в прошедшем году только одно стихотворение」²⁷。

キレエフスキーが念頭においているのは、雑誌「アテナイ」に発表された若書きの作品『宿命的人生の石の上へ… На камень жизни роковой…』か、あるいは1829年にライーチの雑誌「ガラティア」に発表された8篇中の1篇のどちらかである。いずれにしても、もしもモスクワっ子のキレエフスキーがモスクワの雑誌に載ったチュツチェフ作品に気づかなかったとすれば、ペテルブルクにいるプシキンがそれらを発見するのはもっと至難の業であったはずである(ちなみに、腹を立てたライーチはすぐにキレエフスキーの間違いを指摘したのだった)。

プシキンはキレエフスキーの論文を読み、それを論評しようとしたとき、真に「チュツチェフ的な」作品は何一つ知らなかつた、したがって知りもしない詩人について責任を持ってとやかく意見を述べるような立場になかつた——そう考えるのが一番自然である。

チュルコーフはかつてこう書いていた——「プシキンは当時、つまり1830年に、チュツチェフに関する自説を持ってはいなかつた… 彼はせいぜいのところ9篇か10篇、詩人の小品を読む機会に恵まれただけだった Пушкин еще не составил тогда, в 1830 г., своего мнения о Тютчеве… В лучшем случае

²⁷ Киреевский И.В. Полное собрание сочинений в 2-х томах, т.2. М., 1911, с.25.

ему довелось прочесть девять-десять пьес поэта」²⁸。私見によれば、この仮説さえも怪しい。1830年までに発表されたチュッチェフの作品23篇（翻訳を含む）は、18種類（！）もの文集や雑誌の様々な号にばらばらに掲載されたのであり、プーシキンにはそのすべてに目を通すこともできなければ、通す気もなかったであろう。しかも23篇中、本当の意味で「チュッチェフ的」と言える作品はたった6篇しかないことを考慮すれば、プーシキンは1830年の時点ではチュッチェフのポエジーというものをまったく知らなかった——そう前提するのがもっとも正確であろう。

したがって、トィニャーノフの考察は完全に根拠薄弱なものである。プーシキンには未知の詩人の「才能を否定すること」などできなかったはずなのだ。プーシキンはチュッチェフを発見したとき、自分の雑誌「同時代人」の初期数号の一つの巻頭を16篇（！）ものチュッチェフ作品で飾っている（しかもそれらは、名前は添えられず、誰一人として知るところのない「Ф.Т.」いう姓名の頭文字の署名とともに掲載されたのであった）。それは、当時の雑誌（それに作品集）としては前代未聞の処遇であった（後年、周知のように、ネクラースフがプーシキンの「寛大な仕草」を模倣している）。こうした公表の仕方は、いかなる名声も持たない詩人に対するプーシキンの「熱狂的な」対応を物語るものに他ならない、と言ってもよからう。

ところで、トィニャーノフの考察には内的な矛盾があり、その矛盾によって彼の立場は事実上危ういものとなっている。彼は、一方では、プーシキンはチュッチェフの才能を認めていなかったと主張しているが、他方で彼は、プーシキンのこの奇妙な「盲目性」を説明しようとするとき、その原因のすべてを、チュッチェフの創作原理はプーシキンのそれとは異なっているため、彼の詩作品は「プーシキンが注視するとともに、文学前進運動の源動力として期待していたポエジーの領域に入っていなかった」ことのみ求めようとしているのである。

²⁸ «Звенья», т.2, с.260.

だからこそ、とトイニャーノフは言う、だからこそプウシキンがチュツチェフの才能を——より正確には天才を——見抜けなかったのだし、見抜こうとしなかったのだ、と。そして、『夢また夢 Сны』、『シレンチウム! Silentium!』、『海上の夢 Сон на море』、『棺は早や墓穴の中へ降ろされた… И гроб опущен уж в могилу…』、『夜の風よ、何故にお前は泣き叫んでいるのか? О чем ты воешь, ветер ночной?』等々といったまさしく世界的なレベルの作品がプウシキンによって掲載されたのは^{註 22}、トイニャーノフに主張によれば、「詩的不毛の時代にあつて『同時代人』は詩作品を、いかなる篩にかけることもなく掲載していた в период стихового безвременья «Современник» помещал стихи безвсякого разбора」²⁹からだ、ということになる。

しかし、いったいどうやってこうした考察を、プウシキンがシェヴィリョーフやホミャコーフには「真の才能」を認めていたという事実と折り合わせるができるであろうか? いわんやトイニャーノフ自身、これらの詩人とチュツチェフとの創作上の血縁性に太鼓判を押しているのである。そして実際彼は、チュツチェフは新しい道をこれらの詩人よりさらに遠くまで歩いていった(とくに、「フラグメント фрагмент」という新たなジャンルを創り上げた等々)、とまで言ってさえているのである。

以上のことからはっきりと結論づけられるべきは、1830年の時点ではまだプウシキンがホミャコーフとシェヴィリョーフに何らかの「期待」をかけ、彼ら二人はやがて本来の道へと帰還できるはずだと信じていたのに対し、チュツチェフはプウシキンの眼にいわば見込みなき存在として映っていた、ということである。だからこそプウシキンはチュツチェフの才能を全面的に否定した、ということである。是非ともご賛同願いたいのだが、これはまったく根も葉もない考えに過ぎない…

トイニャーノフは一つの非常に重要な要素を考慮していない。プウシキンの新流派に対する姿勢は、時の経過とともに変化していった、しかも劇的に変化していった、という事実である。ギンズブウルクは、先に引いたそのト

²⁹ Там же, с.179.

イニャーノフ回想録においてすでにこう言っている——「論文『プウシキンとチュッチェフ』は複雑な資料をもとに、素朴な真実を主張している。すなわち、大作家はそれぞれ固有の創作原理を備えており、ゆえに彼らは雑食しないということである Статья «Пушкин и Тютчев» на сложном материале утверждает простую истину – у больших писателей есть творческие принципы, поэтому они не всеядны」³⁰。

「雑食 всеядный」という語は不快な語である。だが、おそらくは他のどんな芸術家よりもプウシキンに似合う形容辞として、「美学的な幅広さ эстетическая широта」や「全般的理解力 всепонимание」といった語句があるのも確かである。プウシキンの美学観を追究してゆくと、真っ先に目につくのは彼の受容能力の絶えざる拡張と豊饒化なのである。晩年の彼は、同時代文学の真に意義深い現象はすべて公正的確に評価できるようになっている。事実彼は、ゴーゴリの散文やコリツォーフのポエジー、ベリンスキーの批評といった、彼とは縁遠い文学現象もすべて全面的に受け入れたのであった。さらにまた彼は、シニコーフに対する自分の姿勢を——かつては一切妥協の余地がなかったシニコーフに対する姿勢を——見直しさえしているのである^{注23}。

しかし、本題へ戻ろう。1820年代中葉のプウシキンは「ドイツ派」に対してまだ、完全に否定的とは言えないにせよ、かなりよそよそしい態度を取っていた。1827年[3月2日]、彼はデーリヴィクにこう書いている——「君は僕を、『モスクワ報知』のこと、それにドイツ形而上学のことと責めているけれど、実は僕はドイツ形而上学がひどく嫌いで、軽蔑しているんだ… 僕に言わせると、諸君、諸君はどうして無駄なことをしているんだ、ということになる… Ты пеняешь мне за «Московский вестник» – и за немецкую метафизику. Бог видит, как я ненавижу и презираю ее... Я говорю: господа, охота вам из пустого в порожнее переливать...」。プウシキンが「北方の豎琴」に対して非常に冷淡な態度を取っていたのは、まさしくこの時期のことである。

³⁰ Юрий Тынянов. Писатель и ученый. Воспоминания, размышления, встречи, с.101.

1830年ともなると、「明けの明星」を書評するプッシュキンはすでに「ドイツ派」について敬意を持って語り、この雑誌の代表者たるイワン・キレエフスキーの論文をこれ以上ないほど肯定的に評価している。確かに、「ドイツ派」そのものに対する評価は依然として両義的な性格を漂わせている。プッシュキンはキレエフスキーについてこう書いている——「作者は、個人的な才能において傑出しているわけではないが、そのためにかえって摂取した異国のものの長所をより明確に垣間見させてくれるような我が国の作家たちに対し、ドイツの哲学者たちがまたとないほど有益な影響を及ぼしてくれたことを、力強くも巧みに証明しようとしている Автор сильно и остроумно доказывает преимущественную пользу немецких философов на тех из наших писателей, которые, не отличаясь личным дарованием, тем яснее показывает достоинство чужого, ими приобретенного³¹。換言すれば、プッシュキンはこの時点でもまだ、「ドイツ派」には独自の創作原理が備わっていないと考えていた、ということになろう。

やがて1836年になると、プッシュキンはこう書いている——「今日、ロシアのポエジーは次第にドイツのポエジーとの親密度を高めるとともに、大衆の趣味と要求とは切り離された自らの独立性を毅然として保っている ныне русская поэзия более и более дружится с поэзией германскою и гордо сохраняет свою независимость от вкусов и требований публики³²。

上述のプッシュキン論文が発表されたのは、チュッチェフの詩作品が掲載されたものと同じ「同時代人」誌の第3号である。ピガリョーフが、「隣接し合っていることによって、『ドイツから送られてきた詩篇』という標題は特別な意味を帯びることになった При таком соседстве заглавие «Стихотворения, посланные из Германии» приобретало особое значение」と指摘するとき、彼はまさに正鵠を射ていると言わねばならない。これらの詩作品はあたかも、今引用

³¹ Пушкин А.С. т.7, с.113. [引用は「明けの明星」からのもの。訳注20も参照のこと]

³² Там же, с.405. [引用は、「外国文学、祖国文学の精神に関するロバノフ氏の意見 Мнение М.Е.Лобанова о духе словесности, как иностранной, так и отечественной」からのもの]

したばかりのプシキン論文の数行を例解しているかのように見えるからである³³。

見逃すわけにはゆかないのは、上述の引用においてプシキンが、10年程前にはまだ十分に見定めるまでには至っていなかった「ドイツ派」の、いわば一種の大勝利を認めている、ということである(だからといってもちろん、プシキンが自分本来の創作原理を捨て去ったというわけではない)。

トニャーノフは、文学研究者の間で形成されてきた「感動的な図式」を一すなわちプシキンはチュツチェフを「祝福し」、「彼に堅琴を引き継ごうとしている」という図式を——アイロニカルな視線で眺めている³⁴。ギンズブルクもまたトニャーノフを反復し、こう言っている——「チュツチェフは『擬古典主義者』としてプシキンと格闘したが、プシキンは新米詩人を喜んで歓迎すべき根拠を持っていなかった」³⁵。

だが、「同時代人」1836年3号は、チュツチェフに対する直接的な「祝福」以外の何物であろうか？ 自誌に掲載された詩作品についての一般向け論評をプシキンに期待するなど、奇妙なこととしか言いようがあるまい。しかし、決して忘れてならないのは、プシキンがチュツチェフを高く評価していたことを示す証言が4件も現存するということである。

これら4件の証言はまったく異質な人々によってなされたものである。証言者は、1人目がガガーリン(1836年6月12日付チュツチェフ宛書簡)、2人目がクラエフスキー(A.A.Краевский、1810-1889)か、あるいは彼に近い人の誰か(1838年「ロシアの廃兵 Русский инвалид」48号の「文学付録 Литературные прибавления」)、3人目がプレトニョーフ(П.А.Плетнев、1791-1865/1859年「帝国科学アカデミー第二部門『学術メモ』«Ученые записки» II отделения Императорской академии наук」7頁)、そして4人目がサマーリン(Ю.Ф.Самарин、1819-1876/1873年7月22日付イワン・アクサーコフ宛書簡中の「目撃者たち очевидцы」の言葉)である^{注24}。

³³ Пигарев К. В. Жизнь и творчество Тютчева, с.86.

³⁴ Тынянов. Пушкин и его современники, с.168.

³⁵ Юрий Тынянов, Писатель и ученый..., с.101. (см. примечание 26)

さらに、チュツチェフはプウシキンと「格闘した *боролся*」というギンズブルクの主張も、奇妙という点では勝るとも劣らない。チュツチェフがプウシキンの死に寄せて書いた作品についてはもはや言及するまでもあるまい。そこではダンテスが「皇帝殺し *цареубийца*」と呼ばれる一方で、詩人は「国民の悲しみの旗 *хоругвь горести народной*」で包まれた「神々の生ける楽器 *богов орган живой*」として、またロシアの「初恋 *первая любовь*」として賞賛されているからである^{注25}。1836年7月、チュツチェフはこう書いている^{注26}——「その本質中の本質において、[フランス的知性の不幸、というよりむしろ生来の原罪ともいうべき]修辞学に無縁なロシアの知性に対し、私は喜んで敬意を表します。まさしくそれゆえにこそ、プウシキンは同時代のあらゆるフランス詩人の遙か上位に立っているのです… Мне приятно воздать честь русскому уму, по самой сущности своей чуждающемуся риторике [, которая составляет бедствие или скорее первородный грех французского ума]. Вот отчего *Пушкин* так высоко стоит над всеми современными французскими поэтами...」³⁶。

「敵」がこんな風に見えるものだろうか？ チュツチェフはプウシキンの「敵対者」ではなく、プウシキンとは異なった新しい思潮の大詩人なのだ。トイニャーノフはプウシキンの時代に、もっともこれは彼一人のみならず、オボヤスのメンバー全員に顕著な特徴なのだが、実際に大小様々な流派が入り乱れ、必死になって文学の「覇権」を争っていた——しかも特定の芸術形式原理(たとえば「それ自体が価値である言葉 *самоценное слово*」、「美しき明晰さ *прекрасная ясность*」、「自足したイメージ *самодовлеющий образ*」、「局所的原理 *локальный принцип*」等々といった原理)の名において覇権を争っていた——20世紀初頭の状況によってもたらされた文学的相関関係という概念を投影したのである。トイニャーノフの論文に提示されているのは、まさしくそうしたプウシキンとチュツチェフの相関関係——すなわち「革新者」と「脇道へ」逸脱しようとする新参の「擬古典主義者」との格闘——に他ならない。

³⁶ *Тютчев Ф.И. Стихотворения. Письма. М., «Гослитиздат», 1957, с.376.*

トィニャーノフは新流派を代表する人々を何よりも、独自の「擬古典主義者」として——異なった形式において(とりわけ異なったジャンル形式において)18世紀の詩的原理の多くを復権させようとする「擬古典主義者たち」として——捉えようとした。そこには彼の論文の(ジルムウンスキーとピガリョーフによって指摘された)第三の過誤があり、その過誤のために彼はこの新流派の肯定的な意義を正しく評価できなかつたのである。

しかし、「擬古典主義者たち」の問題について云々する前に是非とも触れておかなければならないのは、幅広い反響を惹起することになった、チュツチェフとプウシキンの相関関係に関する最新の解釈である。それは、文学研究誌「文学の諸問題」に発表されたアンドレイ・ビートフの長篇の一節のことである^{注27}。

だがここでは、主人公レフ・オドエフツェフがチュツチェフとプウシキンの関係についての考察を展開する長篇の一節について言及するというよりもむしろ——なぜなら、作者ビートフには自作の主人公の考察に責任を持つことなどできないからである——、ビートフがこの一節に施した注釈について言及することにしよう。

注釈中のビートフは、自分自身の意見を吐露している——「彼(チュツチェフ)のプウシキンに対する関係が深遠にして一方通行的な、どこか個人的な(たとえそれがプウシキンに対してだけだったにせよ)ものだという事実に、おそらく議論の余地はない Факт развитых, односторонних, в чем-то личностных (пусть только как к поэту) отношений его (Тютчева) к Пушкину, по-видимому, неспорим」(イタリックはコージノフ)³⁷。ビートフはさらに続けて、トィニャーノフの問題設定を「発展させている」。すなわち、トィニャーノフによれば、プウシキンがチュツチェフに「ひどい」態度を取ったのであり、ビートフによれば、チュツチェフがプウシキンに「ひどい」態度を取ったということになる³⁸。ビートフは自作主人公の仮説に「肩入れている」のだが、その仮説によれば、

³⁷ «Вопросы литературы», 1976, №7, с.167

³⁸ Там же, с.168.

チュッチェフの『狂気 Безумие』[1830年?]や『フェートへ А.А.Фету』[1862年]はプウシキンに敵対する作品だといっているのである³⁹。

ここにはトニャーノフ説の独創的な展開が見られる。とはいえ、注意深くことの本質を凝視するならば、オドエフツェフとビートフの論証は悉く木端微塵に砕け散ってしまうであろう。

もっとも分かりやすいところから、すなわちチュッチェフのフェートへの書簡詩『ある者たちには自然によって… Иным достался от природы』(1862年)の本当の意味は何かといふところから始めよう[イタリックはコージノフ]――

ある者たちには自然によって
盲目的な予言本能が授けられている――
彼らはその本能で暗い大地の奥底に
水の音を感^レじ、そして聞^レき取^レる…

マ グ ナ ・ マ テ ル
大いなる地母神に愛でられたる
汝の運命は、他よりずっと羨むべきもの――
お前は目に見える外殻の下に幾度となく
大いなる母その人を看取してきたのだから…

Иным достался от природы
Инстинкт пророчески-слепой, –
Они им *чуют, слышат* воды
И в темной глубине земной…

Великой Матерью любимый,
Стократ завидней твой удел –
Не раз под оболочкой зримой

³⁹ Там же, с.168-169.

Ты самое ее узрел...

オドエフツェフは(そして彼に賛同するビートフも)、この作品について次のような仮説を提示している。すなわち、第1連1行目「ある者たち *иные*」という語を使ったとき、チュッチェフの念頭にあったのはプウシキンであり、それはちょうどほぼ30年前に書かれた『狂気』の場合と同様である、と(ちなみに『狂気』ではこう歌われていた――

狂気は思う、幾筋もの細流の滾りが聞こえる、
地下水の滔々と流れ行く音が、
[地下水の子守唄が、地下水の大地から
噴き出ようとするざわめきが]聞こえる、と。

И мнит, что слышит струй кипенье,
Что слышит ток подземных вод,
[И колыбельное их пенье,
И шумный из земли исход!..])⁴⁰。

だが、私見によれば、チュッチェフが第1連で語っているのは自分自身のことであり、彼はそこで自分自身をこの「ある者たち」の中に数え上げているのに相違ない。なぜなら、この「ある者たち」の性格付けは明らかに、多々あるチュッチェフ自画像、疑いようのない自己評価と呼応しているからである(以下引用中のイタリックはすべてコージノフ)。

おお、炯眼なる我が魂よ、
[おお、不安に溺れるわが心よ――
二つの存在の狭間にあるかのように

⁴⁰ Там же, с.172.

お前の鼓動の、おお、何と激しいことか！…

たとえばお前は——二つの世界の住処、
お前の昼は——病的にして情熱的]
お前の夢は——予言的にして曖昧、
まるで精霊たちの啓示のように… 注²⁸

О вещая душа моя,
[О сердце, полное тревоги –
О, как ты бьёшься на пороге
Как бы двойного бытия!..

Так ты – жилища двух миров,
Твой день – болезненный и страстный.]
Твой сон – *пророчески-неясный*,
Как откровение духов…

あるいは自らのムーサについてはこう歌われている注²⁹——

[やがて夜が水面のカオスさながら更けゆき]
人事不省がアトラスさながら陸地を圧する…
ムーサの無垢な魂を
数多の予知夢で掻き乱すは、ただ神々のみ！

[Тогда густеет ночь, как хаос на водах,]
Беспамятство, как Атлас, давит сушу;
Лишь Музы девственную душу
В *пророческих* тревожат боги снах!

あるいはまた恋人をテーマとした作品ではこう歌われている^{注30}——

此方には黄昏、彼方には熱気と叫喚。
私は夢の中さながらに彷徨い歩く——
ひと感じるはただ一つ、君が私とともにあり、
君のすべてが私の中にあるということのみ。

Сумрак тут, там жар и крики,
Я брожу как бы во сне, —
Лишь одно я живо чую:
Ты со мной и вся во мне.

「(私は)感じる чую」——これはそもそもチュッチェフ抒情詩の基本的モチーフの一つである^{注31}——

するとふと、私は頭上に感じる、
夢ともつかず現ともつかず、
春の息吹が漂っているかのような気配を、
春の歌が歌い出されたかのような気配を。

И вот, я чую, надо мною,
Не наяву и не во сне,
Как бы повеяло весною,
Как бы запело о весне.

「(私には)聞える слышу」という語もまた、チュッチェフ抒情詩の基本モチーフの一つである(『フェートへ』参照^{注32})——

夢現に聞える——そんな組合せなど
とても想像できないのだけれど、
それでも聞える、雪上を滑りゆく橇の音が、
そして春ツバメの盛んに囀る声。

Впросонках слышу я – и не могу
Вообразить такое сочетание,
А слышу свист полозьев на снегу
И ласточки весенней щебетанье.
[1871年1月、あるいは2月]

チュッチェフは祖国の外貌にさえも、ただひたすら何かを、次のように歌われる何かを洞察しようとするのである^{注33}——

[これら貧しき村々、
この貧相な自然——お前こそは
辛酸を耐えに耐えてきた祖国だ、
ロシアの民の祖国なのだ！

異国の尊大な目では、
決して分かるまい、気がつくまい、]
お前の従順な裸身を貫き、
密やかに輝くものの何たるかを。

[Эти бедные селенья,
Эта скудная природа –
Край родной долготерпенья,

Край ты русского народа!

Не поймёт и не заметит
Гордый взор иноплеменный,]
Что сквозит и тайно светит
В нагоде твоей смиренной.

あるいはまた、表面的には「彼に」、すなわち「人間」全般に対する呼び掛けも、
実はあくまでも個人的なものなのである^{注34}——

やがて彼は、無縁にして不可解な夜界の中に、
父祖伝来の遺産をしかと見分けるであろう。

И в чуждом, неразгаданном ночном
Он узнает наследье родовое.

次のような詩行も同じく、あくまでも個人的なものなのである^{注35}——

だが、氷の外殻の下にも
なお生があり、なおせせらぎがある——
そしてときに歴然と聞き取れるのだ、
密やかに秘められた泉の囁き声を！

Но подо льдистою корой
Еще есть жизнь, еще есть ропот –
И внятно слышится порой
Ключа таинственного шепот!

これらの詩行は、フェートへの書簡詩と直接的に呼び交わし合っている。

チュツチェフによるフェートの「優位性」の宣言は(「汝の運命は他よりずっと羨むべきもの…」)、客観的な立場から判断すればもちろん、詩人の創作上の謙譲表現と理解されるべきであろう。チュツチェフが自らの属性として「盲目的な予言本能」と定義づけたものは、彼の詩才の特質、誰にも凌駕され得ない特質なのである。

何より興味深いのは、若きブロークが同様の視座からチュツチェフとフェートの作品を比較検討し、まったく同じようにフェートの「優位性」を確言していることである。ブロークは、1901年12月～1902年1月と打刻された日記にこう記している——「フェートは、チュツチェフにはまだぼんやりと心に浮かぶだけだったものを感受し、それを鮮明に具現化したのだった… 『語られた思想は虚偽である』、『泉を掘り起こしては掻き混ぜるがいい、それらの泉を糧とするがいい、そして黙すがいい』とチュツチェフは言った[『シレンチュム!』]… フェートは沈黙しない。なぜなら沈黙することができないからだ。彼の泉は何よりも高く噴出している Фет ощутил и ясно воплотил то, что еще смутно грезилось Тютчеву... «Мысль изреченная есть ложь», «взрывая, возмутишь ключи, питайся ими и молчи...» – сказал... Тютчев. Фет не молчит – ибо он не может молчать. Его ключи бьют поверх всего⁴¹。

このようにフェートをチュツチェフの上位におくことに対して賛意を示すことは、確かにそれを最初に言い出したのがチュツチェフ自身であるにしても、無理な相談というものであろう。ここで問題にすべきは、比較の基準についてではなく、二人の抒情詩人の創造の天分の深遠な独創性についてでなければならない。

だが、本当のことを言えば、大事なのはこのこと、つまり両者の詩才の独創性ですらない。これまで本書で証明しようとしてきたのは、ビートフによってプウシキン蔑視として解釈されたチュツチェフの詩行が、実は詩人の自

⁴¹ Блок А. Собрание сочинений в 8-х томах, т.7. М.-Л., «Гослитиздат», 1963, с.34, 36.

画像であり自己評価に他ならない——しかも、創作上の謙抑さの命じる自己評価に他ならない——ということである。

ここで話題を『狂気』へと返すとしよう。これは、チュッチェフがすでに自分のムーサの「予言的な夢」について語ってしまった後で書かれた作品である。そのとき彼はさらに、自らの天分についても、「感じること *чувать*」と「聞き取ること *внимать*」という自らの天命についても、すでに書いてしまっていたのである^{注36}——

さながら空がエーテルの細流となって
血管という血管を走り抜けたかのよう！

Как бы эфирию струею
По жилам небо протекло!

そして彼が「聞き取る」ものは、次のように語られる^{注37}——

[我等の誰が杞憂なく聴き得たろうか、]
全世界が沈黙する中で
時間のくぐもった呻き声を、
予言的な暇乞いの声を？

[Кто без тоски внимал из нас,]
Среди всемирного молчанья
Глухие времени стенанья,
Пророчески-прощальный глас?

だが『狂気』で問題にされているのは、「盲目的な予言本能」を備えているのだという、いわば根拠なき自任である——

彼方、蒼穹が焼け爛れた大地と
煙のように溶け合う彼方——
そこでは哀れな狂気が
暢気に楽しく暮らしている。

灼熱の陽光の下、狂気は
炎のような砂に潜り込み、
ガラスのような目で
雲の中に何かを探し求めている。

と、突如立ち上がり、鋭敏な耳を
罅割れた大地へと押しつけ、
貪婪な聴覚で何かに聞き取ろうとする、
額に密やかな満足を漂わせながら。

狂気は思う、幾筋もの細流の滾りが聞こえる、
地下水の滔々と流れ行く音が、
地下水の子守唄が、地下水の大地から
噴き出ようとするざわめきが聞こえる、と。

Там, где с землю обгорелой
Слился, как дым, небесный свод, —
Там в беззаботности веселой
Безумье жалкое живёт.

Под раскалёнными лучами,
Зарывшись в пламенных песках,

Оно стеклянными очами

Чего-то ищет в облаках.

То воспрянет вдруг и, *чутким ухом*

Припав к растреснутой земле,

Чему-то *внемлет* жадным слухом

С довольством тайным на челе.

И мнит, что *слышит* струй кипенье,

Что *слышит* ток подземных вод,

И колыбельное их пенье,

И шумный из земли исход!

この謎めいた不可思議な作品は、私見によれば、苦悩に喘ぐ創作上の懷疑の反映として理解されるべきである。詩人はすでに自分の内に「盲目的な予言本能」が備わっていることを認識してはいるのだが(もっとも、この詩的な定義そのものが詩人の口から発せられるのは、ずっとずっと後年のことである)、ある瞬間にそうした本能の存在への激烈な懷疑に襲われたということである。

ここで問題となっているのは、たんに自分の「予言的」天分の否定ということだけなのではまったくない。『狂気』に具現されているのは、悲劇的なペシズムに覆われた境遇である。そこでは世界そのものが、空虚で煙のような蒼穹と溶け合う焼け爛れた大地として姿を見せている。こうした世界ではただ狂気のみが、雲の中に何かを探し求めることができ、「地下水の滔々と流れ行く音」が聞こえると想像することができるのである。

もっとも早い時期の作品の一つでチュッチェフはこう歌っていた^{注38}——

[奇跡の造化への信仰はなく]

理性は万物を蹂躪し、

あれこれの狭隘な法則に
大気も海も陸地も奴隷さながら
服従させ、丸裸にしてしまった。
生を髓まで乾涸びさせてしまったのだ、
木々に魂を注ぎ込み、
霊に肉を与えてきたあの生を！

[Нет веры к вымыслам чудесным,]

Рассудок все опустошил
И, покорив законам тесным
И воздух, и моря, и сушу,
Как пленников – их обнажил;
Ту жизнь до дна он иссушил,
Что в дерево вливала душу,
Давала тело бестелесным!..

ここに歌われている「世界状況」こそ、『狂気』にも描かれているものに他ならない。

要するに、『狂気』はプウシキンに対するある種の風刺などではなく、自分自身に対する懐疑が——自らの創作可能性に対する懐疑、自分のムーサの「予言的な夢」に対する仮借なき懐疑が——具現化された作品なのである(幸運にもこの懐疑は、後年の詩作品群が証明してくれているように、一時的なものであった)。『狂気』は、後年の書簡詩『フェートへ』と同様、プウシキンとは縁もゆかりもない作品である。それにもかかわらず、ビートフの論証の一切は、これら2作品を土台として構築されているのである。

訳注

01. 引用されているボラトインスキーの作品 4 篇を以下に紹介しよう(以下、訳注で紹介される作品には、内容把握の参考として日本語訳も掲げることとする)。

① РАЗЛУКА

別離

Расстались мы; на миг очарованьем,
На краткий миг была мне жизнь моя;
Словам любви внимать не буду я,
Не буду я дышать любви дыханьем!
Я всё имел, лишился вдруг всего;
Лишь начал сон... исчезло сновиденье!
Одно теперь унылое смущенье
Осталось мне от счастья моего.
(1820?)

私たちは別れた。一瞬、ほんの一瞬だった、
人生が私にうっとり微笑みかけたのは。
もう二度と愛の言葉などに耳を傾けまい、
もう二度と愛の息吹など吸い込むまい！
すべてがあつたのに、突然すべてを失った。
始まりと思つた途端… 夢は消えてしまつた！
いま幸福の後に残されたのは、
陰陰滅滅とした不安のみ。
(1820年?)

② РАЗУВЕРЕНИЕ

幻滅

Не искушай меня без нужды
Возвратом нежности твоей:
Разочарованному чужды
Все обольщенья прежних дней!
Уж я не верю увереньям,
Уж я не верую в любовь
И не могу предаться вновь
Раз изменившим сновиденьям!
Слепой тоски моей не множь,
Не заводи о прежнем слова,
И, друг заботливый, больного
В его дремоте не тревожь!
Я сплю, мне сладко усыпленье;
Забудь бывалые мечты:
В душе моей одно волненье,
А не любовь пробудишь ты.
(1821?)

汝、徒に我を誑かすなかれ、
今更ながらにまた優しくしたりして。
過ぎ去つた日々の魅惑などどれもみな
幻滅せる我には縁なきものなのだから！
我、もはやいかなる保証も
いかなる愛も信じられず、
かつて我を裏切りし夢にいままた
身を任すなどできよう筈もない！
我が盲いた塞ぎの虫を育てるなかれ、
過去のことなど語るなかれ、
汝、気遣い溢れる友よ、そして
病んで微睡む我を悩ますなかれ！
我は眠る、眠りは我に甘く快い。
昔日の夢想など忘却するがいい。
我が心に波風立てるとしても、
愛だけは目覚めさせるなかれ。
(1821年?)

③ ВОДОПАД

滝

Шуми, шуми с крутой вершины,
Не умолкай, поток седой!
Соединяй протяжный вой
С протяжным отзвуком долины.

懸崖の高みからさんざめき落下するがいい、
一瞬も黙さぬがいい、銀髪の奔流よ！
共鳴させるがいい、その延々と続く咆哮を
谷間の延々と続く木霊と。

Я слышу: свищет Аквилон,
Качает елино скрипучей,
И с непогодю ревучей
Твой рев мятежный соглашён.

聞こえるのは、アクィローの唸り声、
トウヒの揺さぶられて軋む音、そして
汝の激しく反抗的な咆哮と
悪天候の絶叫とのハーモニー。

Зачем с безумным ожиданьем
К тебе прислушиваюсь я?
Зачем трепещет грудь моя
Каким-то вещим трепетаньем?

なぜに我、狂おしい期待感とともに
汝の声に耳を澄ませているのだろうか？
なぜに我が胸はある予見的な畏怖に
打ち震えているのであろうか？

Как очарованный, стою
Над дымной бездною твоею,
И, мнится, сердцем разумею
Речь безглагольную твою.

汝の飛沫に煙る奈落を見下ろしながら
我は魅入られたかのように佇んでいる、
汝の言葉にならぬ言葉が我に
以心伝心しているかのように。

Шуми, шуми с крутой вершины,
Не умолкай, поток седой!
Соединяй протяжный вой
С протяжным отзвуком долины.

懸崖の高みからさんざめき落下するがいい、
一瞬も黙さぬがいい、銀髪の奔流よ！
共鳴させるがいい、その延々と続く咆哮を
谷間の延々と続く木霊と。

(1821)

(1821年)

(*「アクィロー」はローマ神話の風の神で、ギリシャ神話の「ボレアス」=北風に相当)

④ ЧЕРЕП

髑髏

Усопший брат! кто сон твой возмугил?
Кто пренебрег святынею могильной?
В разрытый дом к тебе я нисходил,
Я в руки брал твой череп жёлтый, пыльный!

鬼籍の友よ！ 君の眠りを妨げたの誰？
墓地の神聖さを軽んじたのは誰？
私は君の掘り返された住居へと降り立ち、
埃に塗れた黄色い髑髏を手にとってみた！

Ещё носил волос остатки он;
Я зрел на нём ход постепенный тленья.
Ужасный вид! как сильно поражён
Им мыслящий наследник разрушенья!

髑髏にはまだ髪が残っていたが、私はそこに
腐敗の緩やかな進行を見て取った。
何たる悲惨！滅びの宿命の相続者、物思う
私は、その光景に激しく打ちのめされた！

Со мной толпа безумцев молодых
Над ямою безумно хохотала;
Когда б тогда, когда б в руках моих
Глава твоя внезапно провещела!

私の傍らに佇む分別なき若人たちは
穴を見下ろし、野放図に哄笑していた。
よりもよって私の手中で君の頭蓋が突如
声を発するかもしれないその時に！

Когда б она цветущим, пылким нам
И каждый час грозимым смертным часом
Все истины, известные гробам,
Произнесла своим бесстрастным гласом!

君の頭蓋が我等に、人生の酣を謳歌しつつも
常時死の影に怯えている我等に、
来世に周知の真理のすべてを静かな声で
告知知らせてくれるやもしれぬその時に！

Что говорю? Стократно благ закон,
Молчаньем ей уста запечатлевший;
Обычай прав, усопших важный сон
Нам почитать издревле повелевший.

何を馬鹿な？ 髑髏の口に沈黙を封印した
幸福律が幾度となく教えてきたではないか。
死者の厳かな眠りを尊ぶべしと
我等に命じる古来の慣習に間違いはない。

Живи живой, спокойно тлей мертвец!
Всесильного ничтожное создание,
О человек! уверься наконец,
Не для тебя ни мудрость, ни всезнанье!

生者は生き、死者は黙って朽ちゆくがいい！
全能ながらも取るに足らない被造物よ、
おお、人間よ！ いいかげん悟るがいい、
叡智も全知も汝のものではないことを！

Нам надобны и страсти и мечты,
В них бытия условие и пища:
Не подчинишь одним законам ты
И света шум и тишину кладбища!

我等には情熱も夢想も必要不可欠。
そこに我等が存在の条件と糧があるのだ。
人間よ、汝に浮世の喧騒と墓地の静寂とを
一つ定めに傳かせるなどできる筈もない！

Природных чувств мудрец не заглушит
И от гробов ответа не получит;
Пусть радости живущим жизнь дарит,
А смерть сама их умереть научит.
(1824?)

賢者は生来の感情を押し殺しもせず、
来世からの声を聞き取ることもない。
生には生者へ生きる喜びを与えさせ、
死には生者に死に方を教え諭させるがいい。
(1824年?)

02. 引用されているボラトインスキーの作品 6 篇を以下に紹介しよう。

①

Толпе тревожный день приветен, но страшна	群衆に不安な昼は親しくとも、
Ей ночь безмолвная. Бойтся в ней она	無言の夜は恐ろしい。群衆は恐れる、
Раскованной мечты, видений своевольных.	夜に潜む夢を、幻想の自由気儘な乱舞を。
Не легкрылых грёз, детей волшебной тьмы,	我等が恐れるは、自在に飛翔する夢想や
Видений дня боимся мы,	子供の魔力漲る闇ではなく白昼夢、
Людских сует, забот юдольных.	世間の些事全般、浮世の気苦労。

Ощупай возмущённый мрак –	憤怒の闇を手探りしてみるがいい、
Исчезнет, с пустотой сольётся	されば汝を脅かす幻影は消え去り、
Тебя пугающий призрак,	空無と合体し、汝の恐怖は
И заблуждёнью чувств твой ужас улыбнётся.	感覚の誤謬に微笑みかけるだろう。

О сын фантазии! ты благодатных фей	おお、幻想の子よ！ 天佑の妖精の
Счастливый баловень, и там, в заочном мире,	幸運な寵児、遥かな視力及ばぬ世界では
Весёлый семьянин, привычный гость на	快活な家庭人、触知できない諸力の
Неосязаемых властей!	愛すべき佳客！
Мужайся, не слабей душою	勇気を振り絞れ、地上の心配を前に
Перед заботою земною:	気迫を殺いではならない。
Ей исполинский вид даёт твоя мечта;	汝の夢は魂魄に遠大な展望を与える。
Коснися облака нетрепетной рукою –	その自信漲る手で雲に触れるがいい、
Исчезнет; а за ним опять перед тобою	されば雲海霧散し、汝の眼前にはまたも
Обитатели духов откроются врата.	精霊たちの住処の門扉が開かれん。
(1839?)	(1839年?)

② СМЕРТЬ

死

Смерть дочь тьмы не назову я	死を闇の娘とは呼ぶまい。
И, раболепную мечтой	そして死に死者の遺骨を
Гробовый остов ей дарю,	阿諛追従の夢として与へはしても、
Не ополчу её косою.	死に大鎌の武装はしてやるまい。

О дочь верховного эфира!	おお、天高く住まうエーテルの娘よ！
О светозарная краса!	おお、明るく煌めく美女よ！

<p>В руке твоей олива мира, А не губящая коса.</p>	<p>汝が手にするは平和のオリーブ、 首狩りの大鎌ではない。</p>
<p>Когда возникнул мир цветущий Из равновесья диких сил, В твоё храненье всемогущий Его устройство поручил.</p>	<p>野蛮な諸勢力の拮抗から 花咲く平和が生まれ出たとき、 神はその平和の整序保全を 汝の手に委ねられたのだ。</p>
<p>И ты летаешь над твореньем, Согласье прям его ляя, И в нём прохладным дуновеньем Смирять буйство бытия.</p>	<p>汝は被造物の上空を飛び回り、 被造物の争いに和合をもたらし、 被造物に宿る凶暴な生存本能を 冷風の一吹きで宥めすかしてくれる。</p>
<p>Ты укрощаешь восстающий В безумной силе ураган, Ты, на берега свои бегущий, Вспять возвращаешь океан.</p>	<p>汝は尋常ならざる力で 荒れ狂う烈風を鎮め、 岸辺へと迫りくる大洋を もとの場所へと押し戻してくれる。</p>
<p>Даёшь пределы ты растению, Чтоб не покрыл гигантский лес Земли губительную тенью, Злак не восстал бы до небес.</p>	<p>巨大な森が破滅の影で 大地を覆い隠さぬように、 草木が天上まで届かぬように、 汝は植物に生の限りを与える。</p>
<p>А человек! Святая дева! Перед тобой с его ланит Мгновенно сходят пятна гнева, Жар любовстрастия бежит.</p>	<p>だが人間や如何に！ 死よ、聖女よ！ 汝が迫るとき、人間の頬から瞬時に 憤怒の烙印は剥がれ落ち、 淫蕩の情欲は消え去ってしまう。</p>
<p>Дружится праведной тобою Людей недружная судьба: Ласкаешь тою же рукою Ты властелина и раба.</p>	<p>人間たちの不仲な運命も 公明正大な汝のおかげで相和する。 汝は王も奴隸も 同じ一つ手で愛撫する。</p>
<p>Недоуменье, принужденье – Условье смутных наших дней, Ты всех загадок разрешенье,</p>	<p>当惑と強制——それが 混迷極まる我らが時代の条件。 汝はあらゆる謎を解く鍵、</p>

Ты разрешение всех цепей.
(1828)

汝はあらゆる束縛を断ち切る快刀。
(1828年)

③

На что вы, дни! Юдольный мир явленья
Свои не изменит!
Все ведомы, и только повторенья
Грядущее сулит.

なぜに在る、月日よ！浮世のどんな現象も
未来永劫どうあっても変じはすまい！
すべては既知の現象、未来が約束するのは
森羅万象の反復のみ。

Недаром ты металась и кипела,
Развитием спеша,
Свой подвиг ты свершила прежде тела,
Безумная душа!

汝が駆けずり回り、いきり立ったのも、
成長を急ぎ、身体に先んじて
偉業を成し遂げたのも無駄ではなかった、
狂気の魂魄よ！

И, тесный круг подлунных впечатлений
Сомкнувшая давно,
Под веяньем возвратных сновидений
Ты дремлешь; а оно

汝は月下の印象の狭い輪を
とうの昔に閉じ合わせ、
回帰する夢また夢のそよぎの下で
微睡眠、そして夢のそよぎは

Бессмысленно глядит, как утро встанет,
Без нужды ночь сменя,
Как в мрак ночной бесплодный вечер канет,
Венец пустого дня!
(1840?)

ぼんやりと見守っている、朝が起き上がり
謂われなく夜に取って代わる様を、
不毛な夕べが夜の闇へと溶け込む様を、
虚ろな真昼の日輪を！
(1840年?)

④ НЕДОНОСОК

未熟児

Я из племени духов,
Но не житель Эмпирея,
И, едва до облаков
Возлетев, паду, слабея.
Как мне быть? Я мал и плох;
Знаю: рай за их волнами,
И ношусь, крылатый вздох,
Меж землёй и небесами.

我は精霊の種族に属すとも、
最高天界の住人にはあらずして、
雲海に届かんばかりに飛翔すれど、
やがて精根尽き果て落下する。
我、如何にあらん？ 我、弱小未熟なれば。
我、天国は雲の波また波の彼方と知り、
有翼の溜息となって
天地の間を駆け経巡る。

Блещет солнце – радость мне!
 С животворными лучами
 Я играю в вышине
 И весёлыми крылами
 Ластюсь к ним, как облачко;
 Пью счастливо воздух тонкой,
 Мне свободно, мне легко,
 И пою я птицей звонкой.

輝ける太陽——それは我が喜び！
 我、生気を与えし陽光と
 空高くにて戯れ、
 片雲さながら朗らかな翼を
 陽光の愛撫に甘えさせ、
 うっとり希薄な大気を胸に吸う。
 我、自由にして気も軽く、
 高らかに囀る小鳥さながら歌を口遊む。

Но ненастье заревёт
 И до облак, свод небесный
 Омрачивших, вознесёт
 Прах земной и лист древесный:
 Бедный дух! ничтожный дух!
 Дуновенье роковое
 Вьёт, крутит меня, как пух,
 Мчит под небо громовое.

だがやがて、荒天が唸り声を上げ、
 大地の塵芥や木の葉を
 天空を覆い隠した雲まで
 高々と舞い上げるだろう。
 哀れな魂魄！ 愚にもつかぬ魂魄！
 そんな我を不吉なそよ風が
 和毛のようにくねらせ、踊らせ、
 雷鳴轟く空の下を運び去る。

Бури грохот, бури свист!
 Вихорь холодный! Вихорь жгучий!
 Бьёт меня древесный лист,
 Удушает прах летучий!
 Обращусь ли к небесам,
 Оглянусь ли не землю –
 Грозно, чёрно тут и там;
 Вопль унылый я подъямлю.

嵐の轟音、嵐の喘ぎ！
 凍てつく旋風！ 灼熱の旋風！
 我、木の葉に襲われ、
 舞い飛ぶ塵芥に息も絶え絶え！
 空を見上げて
 地上を見回しても——
 上も下も暗く恐ろしく、
 我、物悲しく号泣する。

Смутно слышу я порой
 Клич враждующих народов,
 Поселян беспечных вой
 Под грозой их переходов,
 Гром войны и крик страстей,
 Плач недужного младенца...
 Слёзы льются из очей:
 Жаль земного поселенца!

時折ぼんやり我が耳に聞こえてくる、
 敵対する諸民族の雄叫びが、
 雷雨の中を移動する
 暢気な農民の怒号が、
 戦争の雷鳴が、情熱の滾りが、
 病弱な若者の泣声が...
 我が両の目から涙が零れる、
 地上の住民の何と哀れなことか！

Изнывающий тоской,
Я мечусь в полях небесных,
Надо мной и подо мной
Беспредельных – скорби тесных!
В тучу кроюсь я, и в ней
Мчусь, чужд земного края,
Страшный глас людских скорбей
Гласом бури заглушая.

Мир я вижу как во мгле;
Арф небесных отголосок
Слабо слышу... На земле
Оживил я недоносок.
Отбыл он без бытия:
Роковая скоротечность!
В тягость роскошь мне твоя,
О бессмысленная вечность!
(1835?)

塞ぎの虫に苦しめられながら、我、
天界を右往左往する。
我が頭上にも足下にも悲しみが
どこまでもびっしりと広がっている！
我、黒雲に身を潜めて疾走する、
地上世界へは目もくれず、
人間の悲しみのおぞましき声を
嵐の声で掻き消しながら。

我が目に入る世界はさながら五里霧中。
天上の堅琴の木壺が
我が耳に微かに届く… 地上で
我が生を与えしは未熟児。
彼は存在する間もなく息絶えた。
その運命の何たる儚さ！
おお、無意味な永遠よ！ 我には
汝の豪華絢爛が重荷なのだ。
(1835年)

⑤ РИФМА

韻

Когда на играх олимпийских,
На стогнах греческих недавних городов,
Он пел, питомец муз, он пел среди валов
Народа, жадного восторгов мусийских, –
В нём вера полная в сочувствие жила.
Свободным и широким метром,
Как жатва, зыблемая ветром,
Его гармония текла.
Толпа вниманием окована была,
Пока, могучим сотрясеньем
Вдруг побеждённая, плескала без конца
И струны звучные певца
Дарила новым вдохновеньем.
Когда на греческий амвон,
Когда на римскую трибуну

オリンピア競技会に際し
歴史も浅いギリシャ諸都市の広場で
ムーサの弟子は歌った、人波の中で歌った
音楽の恍惚に貪欲な人波の中で——彼には
共感獲得に満腔の自信が息づいていた。
自由にして雄大な韻律に乗って
風に揺れる収穫穀物のように
彼のハーモニーは醸成されていた。
群衆はしばし聴覚を釘付けにされ、
やがて強烈な衝撃によって
突如打ちのめされ、延々と拍手喝采し、
歌い手の朗々たる音楽に
新たな靈感を贈呈したのだった。
ギリシャの説教台に
ローマの演壇に

Оратор восходил, и славословил он
Или оплакивал народную фортуну,
И устремлялися все взоры на него,

И силой слова своего

Вития властвовал народным произволом, — 国民の意思を掌握し切ったとき——

Он знал, кто он; он ведать мог,
Какой могучий правит бог
Его торжественным глаголом.
Но нашей мысли торжищ нет,
Но нашей мысли нег форума!..
Меж нас не ведает поэт,
Высок полёт его иль нет,
Велика ль творческая дума.
Сам судия и подсудимый,
Скажи: твой беспокойный жар —
Смешной недуг иль высший дар?
Реши вопрос неразрешимый!
Среди безжизненного сна,
Средь гробового хлада света,
Своею ласкою поэта
Ты, рифма! радуешь одна.
Подобно голубю ковчега,
Одна ему, с родного берега,
Живую ветвь приносишь ты;
Одна с божественным порывом
Миришь его твоим отзывом
И признаёшь его мечты!

(1840?)

弁士が登り、国民の幸運を賛美するか、
あるいはその悲運を悲憤慷慨し、
聴衆全員の視線を一身に集め、

言葉の力によって

彼は自分が何者かを知った、
全能の神がどれほど彼の荘嚴な言葉を
支配しているかを知り得たのだった。
だが我等が思想には市場がない、
だが我等が思想には広場がない!…
我等が間では詩人には知る術がない、
彼の飛翔の高いか否かを、
彼の創造力の高邁か否かを。
自ら判事にして被告の詩人よ、告げよ、
汝の不安な情熱——それは
馬鹿げた病か、はたまた至高の賜物か?
解けぬ難題を解いて見せるがいい!
生気なき夢の最中で
浮世の墓場のような冷たさの最中で
愛撫によって詩人を喜ばせるのは、
韻よ! ただ汝あるのみ。
ノアの方舟の鳩のように、韻よ、
汝だけが生地から詩人のもとへ
生きた枝を運んでこられるのだ。
神的激情を備えた汝だけが
その応答によって詩人を和ませ、
詩人の夢想を知り抜いているのだ!

(1840年?)

⑥ ОСЕНЬ

秋

1

И вот сентябрь! замедля свой восход,
Сияньем хладным солнце блещет,
И луч его в зеркале зыбком вод
Неверным золотом трепещет.

1

もう9月! 太陽は日の出の足を鈍らせ、
冷たい光を放っている。
その光はゆらゆら揺れる水面で
微かな金色を明滅させている。

Седая мгла виётся вокруг холмов;
 Росой затоплены равнины;
 Желтеет сень кудрявая дубов,
 И красен круглый лист осины;
 Умолкли птиц живые голоса,
 Безмолвен лес, беззвучны небеса!

2

И вот сентябрь! и вечер года к нам
 Подходит. На поля и горы
 Уже мороз бросает по утрам
 Свои серебристые узоры.
 Пробудится ненастливый Эол;
 Пред ним помчится прах летучий,
 Качаясь, завоет роща, дол
 Покроет лист её падучий,
 И набегут на небо облака,
 И, потемнев, запенится река.

3

Прощай, прощай, сияние небес!
 Прощай, прощай, краса природы!
 Волшебного шептанья полный лес,
 Златочешуйчатые воды!
 Весёлый сон минутных летних нег!
 Вот эхо в рощах обнажённых
 Секирою тревожит дровосек,
 И скоро, снегом убелённых,
 Своих дубров и холмов зимний вид
 Застылый ток туманно отразит.

4

А между тем досужий селянин
 Плод годовых трудов собирает;
 Сметав в стога скошённый злак долин,
 С серпом он в поле поспешает.

灰色の靄が丘の周りに纏わりついている。
 平原は一面露に覆われている。
 檜林のこんもりとした樹冠は黄に染まり、
 ヤマナラシの丸い葉は紅葉している。
 小鳥たちの元気な声は聞こえず、
 森も空も静寂に身を委ねている。

2

もう9月! 1年の黄昏時が
 近づき、野々や山々には
 早くも厳寒が朝な朝な
 その銀色の模様を投げ掛けている。
 やがて不機嫌なアイオロスが目覚まし、
 塵芥がもうもうと飛び交い、
 木立が身を震わせながら咆哮し、
 その落葉が谷を埋め尽くし、
 空には雲がもくもくと湧き上がり、
 川は顔を曇らせながら泡立つであろう。

3

さらば、さらばだ、空の輝きよ!
 さらば、さらばだ、自然の美しさよ!
 魅惑的な囁きに満たされた森よ、
 金色の鱗に覆われた水面よ!
 夏の瞬時の安逸の楽しい夢よ!
 葉を落とした木立では、ほら、
 樵の斧の音が淋しく木霊している。
 まもなく雪化粧した
 檜林や丘陵の冬景色がぼんやりと
 凍てついた水面に映し出されるだろう。

4

さてさて手隙となった村人は
 1年の仕事の成果を取り入れる。
 谷間で刈った穀物を山と積み、
 鎌を手に野畑へ急ぐ。

Гуляет серп. На сжатых бороздах
Снопы стоят в копнах блестящих
Иль тянутся, вдоль жнивы, на возах,
Под тяжкой ношею скрипящих,
И хлебнх скирд золотоверхий град
Подъемлется кругом крестьянских хат.

5

Дни сельского, святого торжества!
Овины весело дымятся,
И щеп стучит, и с шумом жернова
Ожившей мельницы крутятся.
Иди, зима! на строги дни себе
Припас ораатай много блага:
Отрадное тепло в его избе,
Хлеб-соль и пеннистая брага;
С семьёй своей вкусит он без забот
Своих трудов благословенный плод!

6

А ты, когда вступаешь в осень дней,
Ораатай жизненного поля,
И пред тобой во благостыне всей
Является земная доля;
Когда тебе житейские бразды,
Труд бытия вознаграждая,
Готовятся подать свои плоды
И спеет жатва дорогая,
И в зернах дум её собираешь ты,
Судеб людских достигнув полноты, —

7

Ты так же ли, как земледел, богат?
И ты, как он, с надеждой сеял;
И ты, как он, о дальнем дне наград
Сны позлащённые лелеял...

鎌が舞う。刈り取られた畝々に
積まれた穀物の束が煌めくかと思えば、
重い積荷にがたびし軋む荷車に乗せられ、
刈跡沿いに列をなして運ばれてゆき、
百姓屋の周りには穀物の山また山が
その金色の頭を反り返らせている。

5

村の聖なる祝賀の日々よ！
穀物乾燥場は陽気に煙を棚引かせ、
脱穀竿は唸り、息を吹き返した製粉所の
碾き臼はごろごろと回っている。
冬よ、来い！ 厳しい日々へ備え、
耕作者は数多の富を蓄えている。
屋内の快適な暖、
美味しい料理に泡立つビール。
耕作者は家族とともにぬくぬくと
自らの労働の豊かな果実を噛み締める！

6

活力溢れる野畑の耕作者よ、
日々が秋を迎えると、
汝の前には地上の幸福が
恵みのすべてを携えて現れる。
活力溢れる野畑が汝に対し、
日々の労働に報いんと
その果実を与えようとするとき、
貴重な刈入の時期が熟すとき、
汝は刈り入れながら物思いに誘われ、
人間の運命の豊饒へと思いを致す——

7

富者よ、汝もまたそうか、耕作者同様に？
汝もまた彼同様、希望と共に種を播き、
汝もまた彼同様、報われる遠い日について
黄金の夢を惹きつけたのか…

Любуйся же, гордися восставшим им!
 Считаю свои приобретения!..
 Увы! к мечтам, страстям, трудам мирским
 Тобой скоплённые презренья,
 Язвительный, неотразимый стыд
 Души твоей обманов и обид!

8

Твой день взошёл, и для тебя ясна
 Вся дерзость юных легковерий;
 Испытана тобою глубина
 Людских безумств и лицемерий.
 Ты, некогда всех увлечений друг,
 Сочувствий пламенный искатель,
 Блистательных туманов царь – и вдруг
 Бесплодных дебрей созерцатель,
 Один с тоской, которой смертный стон
 Едва твоей гордыней задушен.

9

Но если бы негодованья крик,
 Но если б вопль тоски великой
 Из глубины сердечныя возник
 Вполне торжественный и дикой, –
 Костями бы среди своих забав
 Содроглась ветреная младость,
 Играющий младенец, зарыдав,
 Игрушку б выронил, и радость
 Покинула б чело его навек,
 И живо б в нём умер человек!

10

Зови ж теперь на праздник честный мир!
 Спешу, хозяин тороватый!
 Проси, сажай гостей своих за пир
 Затеяливый, замысловатый!

愛でよ、誇れよ、遠い日の到来を！
 己の収穫を数え上げるがいい！…
 嗚呼！ 夢と情熱と農村の労働に対する
 汝の積年の侮蔑、それらに対する
 虚偽と遺恨に塗れた汝が魂の
 毒々しくも打ち消し難い羞恥心！

8

汝の陽が上り、いまや汝に
 若気の至りの厚顔無恥を悉く明らか。
 世俗の無分別も偽善も
 汝はほとんど経験済み。
 かつては放蕩三昧だった汝、
 共感を熱く求めてやまなかった汝、
 眩い謎の支配者かと思えば、ふと不毛な
 密林の観照者ともなった汝、いま汝に
 寄り添うは塞ぎの虫のみ、汝の矜持が辛くも
 末期の呻きを封じ込めている塞ぎの虫のみ。

9

だがもしや憤怒の叫びが、
 だがもしや巨大な塞ぎの虫の号泣が、
 威風堂々と野生の姿で
 心の深奥から吐き出されたなら——
 軽薄な青春はその遊興の只中で
 骨の髄まで震え上がるであろう、
 遊びに耽る子供は、大声で泣き出し、
 玩具を投げ捨てるだろう、そして喜悅は
 子供の思念を永遠に見捨て、子供の人格は
 生きながら葬り去られてしまうであろう！

10

いまこそ公正な世界を祝賀するがいい！
 急ぎ祝うがいい、気前よき経営者よ！
 客人を招き、酒宴の席に着かせるがいい、
 華麗絢爛たる酒宴の席へ！ 酒宴は

Что лакомству пророчит он утех!
Каким разнообразьем брашен
Блещет он!.. Но вкус один во всех,
И, как могила, людям страшен;
Садись один и тризну соверши
По радостям земным твоей души!

11

Какое же потом в груди твоей
Ни водворится озаренье,
Чем дум и чувств ни разрешится в ней
Последнее вихревращенье –
Пусть в торжестве насмешливом своём
Ум бесполезный сердца трепет
Угмонит и тщетных жалоб в нём
Удушит запоздалый лепет,
И примешь ты, как лучший жизни клад,
Дар опыта, мертвящий душу хлад.

12

Иль, отряхнув видения земли
Порывом скорби животворной,
Её предел завидя недали,
Цветущий брег за мглюю чёрной,
Возмездий край, благовестящим снам
Доверясь чувством обновлённым,
И бытия мятежным голосам,
В великом гимне примирённым,
Внимающий, как арфам, коих строй
Превыспренний не понят был тобой, –

13

Пред промыслом оправданным ты ниц
Падёшь с признательным смиреньем,
С надеждою, не видящей границ,
И утолённым разуменьем, –

馳走に大きな慰安を突合せてくれよう！
酒宴の放つ輝きの何と多彩なことか！…
だが、どれを取っても同じ一つ味、それは
世間にとっては墓場の如き恐ろしき味。
汝一人座し、汝が魂の地上での喜びを偲び、
追善供養を営むがいい！

11

やがて汝の胸中に如何なる灯明が
根付くことになろうとも、
汝の胸中の思念と感情の最後の竜巻が
どのような決着を見ようとも——
たとえ無益な知性が嘲笑的な凱歌とともに
心の戦慄きを宥めすかし、
心の空しい苦情の遅ればせの眩きを
押し殺そうとも、人生最良の宝として
汝は受け入れるだろう、経験の贈物を、
魂を死に追いやる冷徹さを。

12

あるいは、地上の幻想を澁刺とした
悲しみの激発によって振り払い、
間近にその悲しみの限界を睨み、
漆黒の闇の彼方にある花盛りの岸辺を、
復讐の終焉を見据えつつ、多幸を告げる夢を
更新された感覚によって信じて疑わず、
そして、調和の偉大な賛歌の中に、
まるでそれが汝の理解し得ない堅琴の
至高の調べでもあるかのように、
存在の反逆の声を聞き分けながら——

13

汝は真つ当な生業の前に倒れ伏そう、
謝意の籠った恭しさと、
尽きることを知らない期待と
満ち足りた分別とともに——

Знай, внутренней своей вовеки ты
 Не передашь земному звуку
 И лёгких чад житейской суеты
 Не посвятишь в свою науку;
 Знай, горячая иль дольная, она
 Нам на земле не для земли дана.

14

Вот буйственно несётся ураган,
 И лес подымлет говор шумный,
 И пенится, и ходит океан,
 И в берег бьёт волной безумной;
 Так иногда толпы ленивый ум
 Из усыпления выводит
 Глас, пошлый глас, вещатель общих дум,
 И звучный отзыв в ней находит,
 Но не найдёт отзыва тот глагол,
 Что страстное земное перешёл.

15

Пускай, приняв неправильный полёт
 И вспять стези не обретая,
 Звезда небес в бездонность утечёт;
 Пусть заменит её другая;
 Не явствует земле ущерб одной,
 Не поражает ухо мира
 Падения её далёкий вой,
 Равно как в высотах эфира
 Её сестры новорождённый свет
 И небесам восторженный привет!

16

Зима идёт, и тощая земля
 В широких лысынах бессилья,
 И радостно блиставшие поля
 Златыми класами обилья,

知るがいい、汝は己が心の裡を
 地上の音として表現することも、
 呑気な連中の浮世の気苦労を
 己が知恵とはできないことを、
 天上のと地上的とを問わず、教訓の我らに
 授けられしは地上のためではないことを。

14

見よ、烈風が牙を剥き出して疾走し、
 森はがなり声を立て、
 大洋は泡立ち大ききうねり、その波は
 狂ったように岸边に砕け散る。
 群衆の怠惰な知性が眠気に駆られて
 ときに声を、卑俗な声を振り絞れば、
 普遍思想の予言者はそこに
 朗々たる応答を見出そうとするが
 地上の情熱を潜り抜けた応答の言葉を見出すことなど断じてないであろう。

15

たとえ天の星が変則な飛翔に身を委ね、
 帰路を知らずに奈落へ落ちるとしても、
 それはそれがかまわない。
 その代わりを他の星にさせるがいい。
 地上に対する被害は明らかにならず、
 その星の落下の遙かな号泣が
 世界の耳目を引くこともありはしない。
 それはちょうど、エーテル漂う高みで
 その星の姉妹が放つ生まれたばかりの輝きが
 空に感無量の挨拶を送るようなもの！

16

冬が訪れ、痩せ衰えた大地は無力にして
 無一物の広闊の只中に横たわっている。
 夥しい黄金の麦穂に
 喜々として輝いて居た草原も、

Со смертью жизнь, богатство с нищетой – 生も死も、富者も貧者も——
 Все образы години бывшей 逝きし一年の森羅万象が、
Сравниются под снежной пеленой, 森羅万象すべてを一樣に覆い隠す
 Однообразно их покрывшей, – 雪の掛布の下で肩を並べ合っている——
Перед тобой таков отныне свет, この先汝を待つ世界もまたかくあるうとも、
Но в нём тебе грядущей жатвы нет! そこに汝が与るべき未来の収穫はない！
(1836-1837) (1836～1837年)

03. ジョン・ダン(John Donne, 1573-1631)は、イギリスの詩人、神学者。ヘミングウェイ(Ernest Miller Hemingway, 1899-1961)の長篇『誰がために鐘は鳴る For whom the bell tolls』(1940)の冒頭には、ダンの説教集である『冥想録 17 番 Meditation XVII』がエピソードとして引用されている。長篇の題名そのものもそこから採られている。

04. 「カメナ」はローマ神話の女神で、ギリシャ神話の「ムーサ」(複数形は「ムーサイ」と同一視される。9人姉妹で詩歌や音楽の女神とされる。「フォルトゥナ」はローマ神話の運命の女神で、ギリシャ神話の「テュケ」に相当する。「ペルーン」は東スラヴの主神で、雷と稲妻の男神。五穀豊饒の神、戦士の守護神ともされる。

05. 引用は、『なぜに奴隷は自由の夢を必要とするか? К чему невольнику мечтания свободы?』(全1連18行)の10～18行目。最初に9行は以下の通り。

К чему невольнику мечтания свободы? なぜに奴隷には自由の夢が必要か? ほら、
Взгляни: безропотно текут речные воды 川の水は不平も言わず、お定まりの岸間を
В указанных брегах, по склону их русла; 川床の傾斜に沿って流れてゆく。
Ель величавая стоит, где возросла, 樅は巨木となっても逃れる術なく、
Невластная сойти. Небесные светила 育った場所にじっと立っている。天体は
Назначенным путём неведомая сила 不可思議な力によって定められた道を
Влечёт. Бродячий ветер не волен, и закон 運ばれてゆく。気儘な風も自由ではなく、
Его летучему дыханью положен. その吹き行く先は掟で決められている。
Уделу своему и мы покорны будем, 我等もまた自らの運命に従うとしよう、

06. 引用は『チュウツェフの詩集を前にして На книжке стихотворений Тютчева』(1883年12月)、全3連12行の第1連4行。続く2～3連は以下の通り。

В сыртах не встретишь Геликона, Уралの高地にヘリコン山は見られず、
На льдинах лавр не расцветёт, 氷山に月桂樹の花は咲かず、

У чукчей нет Анакреона,
К зырянам Тютчев не придёт.

チュクチ人にアナクレオンはおらず、
ズリヤン人をチュッチェフが訪う筈もない。

Но муза, правду соблюдая,
Глядит – а на весах у ней
Вот эта книжка небольшая
Томов премногих тяжелей.

だが真実を守護するムーサは見抜いている——
ムーサの天秤にあっては
この小さな本こそが
万卷の書物よりも重いことを。

07. 言及されているチュッチェフの詩作品 6 篇を以下に紹介しよう。

① СНЕЖНЫЕ ГОРЫ

雪嶺

Уже полдневная пора
Палит отвесными лучами, –
И задымилася гора
С своими чёрными лесами.

真昼はすでに
垂直の光で大地を焦がし——
鬱蒼たる森に覆われた山には
霧が立ち込み始めている。

Внизу, как зеркало стальное,
Синеют озера струн
И с камней, блещущих на зное,
В родную глубь спешат ручьи...

下方では、鋼鉄の鏡のように
湖から流れ出る幾筋もの溪流が青ずみ、
炎暑に煌めく岩々から滲む細流が
幾筋も深遠な母の懐へと急いでいる…

И между тем как полусонный
Наш дольний мир, лишённый сил,
Проникнут негой благовонной,
Во мгле полуденной почил, –

そして我等住まう下界が
うつらうつらと力を失い、
香しき安逸に浸って、
真昼の霧の中に微睡むとき——

Горé, как божества родные,
Над издыхающей землёй,
Играют выси ледяные
С лазурью неба огневой.
(1829?)

遙か頭上では、崇むべき神々のように、
氣息奄々の大地を見下ろしながら
氷に覆われた山の嶺々が
空の燃えるような青と戯れている。
(1829年?)

②

Что ты клонишь над водами,
Ива, макушку свою

何故にお前は、柳よ、
その頭頂を水面へ垂れ、

И дрожащими листьями,
Словно жадными устами,
Ловишь беглую струю?..

その震える葉で
渴き果てた口さながらに
早瀬を捕まえようとしているのか?…

Хоть томится, хоть трепещет
Каждый лист твой над струёй...
Но струя бежит и плещет,
И, на солнце нежась, блещет,
И смеется над тобой...
(1835?)

お前の葉の一枚一枚は
不安に苛まれ、身を振っているのに…
だが早瀬は音を立てて滔々と流れ、
陽光にうっとりとし身を煌めかせながら、
お前を嘲笑っている…
(1835年?)

③
Как весел грохот летних бурь,
Когда, взметая прах летучий,
Гроза, нахлынувшая тучей,
Смутит небесную лазурь
И опрометчиво-безумно
Вдруг на дубраву набегит,
И вся дубрава задрожит
Широколиственно и шумно!..

夏の嵐の雄叫びの何と楽しげなことか、
黒雲となって押し寄せた雷雨が、
軽塵を巻き上げ、
空の青さを掻き乱し、
狂ったかのように性急に
忽然として檜林を襲撃し、
檜林の全体がその広葉を
ざわざわと震わせ始めるそのときの!…

Как под незримою пятой,
Лесные гнутся исполины;
Тревожно ропщут их вершины,
Как совещаясь меж собой, –
И сквозь внезапную тревогу
Немолчно слышен птичий свист,
И кой-где первый жёлтый лист,
Крутясь, слетает на дорогу...
(1851)

不可視の力で抑えつけられるかのように、
森の巨木たちが深々と身を屈め、
その頭頂が、互いに意見を交わすかのように
不安気に激しくざわめき立つそのときの——
不意に訪れた不安の合間を縫って
鳥の囀りがとめどなく聞こえ、
そこかしこに最初の紅葉が
道にくるくる舞い落ちるそのときの…
(1851年)

④ 1-ОЕ ДАКАБРЯ 1837

1837年12月1日

Так здесь-то суждено нам было
Сказать последнее прости...
Прости всему, чем сердце жило,

そこで最後の別れを告げるのが
私たちの定めであった…
さらば、心の糧だったものすべてよ、

Что, жизнь твою убив, её истлило
В твоей измученной груди!..

君の命を奪い、君の憔悴した胸の鼓動を
腐敗させたものすべてよ、さらば!…

Прости... Через много, много лет
Ты будешь помнить с содроганьем
Сей край, сей берег с его полуденным сияньем,
Где вечный блеск и долгий цвет,
Где поздних, бледных роз дыханьем
Декабрьский воздух разогрет.
(Декабрь 1837)

さらば… この先何年経とうが君は
慄きと共に覚えていることだろう、
昼の光輝に包まれたこの国、この岸边を、
久遠の光が煌めき、長久の花が咲き、
遅咲きの弱い薔薇の息吹が12月の
大気を温めるこの国、この岸边を。
(1837年12月)

⑤

Весь день она лежала в забытьи,
И всю её уж тени покрывали.
Лил тёплый летний дождь – его струи
По листьям весело звучали.

その人は終日人事不省のまま横たわり、
影がその人の全身を覆い尽くそうとしていた。
暖かい夏の雨が降り注ぎ、幾筋もの水流が
葉々の間ではしゃいでいた。

И медленно опомнилась она,
И начала прислушиваться к шуму,
И долго слушала – увлечена,
Погружена в сознательную думу...

その人はゆるゆると我に返ると、
辺りのざわめきに耳を敏て始め、
長らく聞いていた——意識明瞭な物思いに
我を忘れてひたすらに耽っていた…

И вот, как бы беседуя с собой,
Сознательно она проговорила
(Я был при ней, убитый, но живой):
«О, как всё это я любила!»

そして今、まるで自分と対話するかのよう
に自らの意志ではっきりと話し出した
(その傍らの私は生きた死者であった)——
「おお、このすべてが大好きだった!」と。

.....

.....

Любила ты, и так, как ты, любить –
Нет, никому ещё не удавалось!
О господи!.. и это *пережить*...
И сердце на клочки не разорвалось...
(Октябрь или первая половина
декабря 1864)

君は愛した、君のように愛すること——それは
おお、これまで他の誰にもできなかったこと!
おお神よ!… だがそれを失わねばならぬ…
それでも心は張り裂けなどしなかった…
(1864年10月、あるいは12月前半)

⑥ НАНАНУНЕ ГОДОВЩИНЫ
4 АВГУСТА 1864 Г.

1864年8月4日の命日前夜

Вот бреду я вдоль большой дороги
В тихом свете гаснувшего дня...
Тяжело мне, замирают ноги...
Друг мой милый, видишь ли меня?

私は大きな街道をのろのろと歩いてゆく、
消えかかる静かな日差しの中を…
心は重く、足は疲れて棒のよう…
愛しき人よ、君に私が見えるだろうか？

Всё темней, темнее над землею –
Улетел последний отблеск дня...
Вот тот мир, где жили мы с тобою,
Ангел мой, ты видишь ли меня?

上空は次第に暗さを増しゆき——
昼の最後の残照も消えてしまった…
ほら、あれが私たち二人の暮らした世界。
私の天使よ、君に私が見えるだろうか？

Завтра день молитвы и печали,
Завтра память рокового дня...
Ангел мой, где б души ни витали,
Ангел мой, ты видишь ли меня?
(3 августа 1865)

明日は祈りと悲しみの日、
明日は運命の一日を偲ぶ日…
私の天使よ、魂の住処の何処にあるうとも、
私の天使よ、君に私が見えるだろうか？
(1865年8月3日)

08. 引用は『灰青色の影たちが交錯し合い… Тени сизые смешались...』(1835?)、全2連
16行中の第1連8行。第2連8行は以下の通り。

Сумрак тихий, сумрак сонный,
Лейся в глубь моей души,
Тихий, тёмный, благовонный,
Всё залей и утиши.
Чувства мглой самозабвенья
Переполни через край!..
Дай вкусить уничтоженья,
С миром дремлющим смешай!

静かな薄明よ、眠れる薄明よ、
我が魂の深奥に流れ込むがいい、
静かにして暗い、香しき薄明よ、
すべてを覆い尽くし、黙らせるがいい。
感覚という感覚に忘我恍惚の闇を
溢れるほどに満たすがいい！…
感覚という感覚に破滅の味を嘗めさせ、
それらを微睡む世界と溶け合わせるがいい！

09. 引用は、『ロシア文学論 Ряд статей о русской литературе』(1861年)第2章「***ボフ氏と芸術問題 Г-н – бов и вопрос об искусстве」からのもの。ベルヴェデレのアポロン像を見て、凄まじいショックを受けた少年について述べた件で、引用部は次のよう長文の一部をなしている——「それゆえ、少年の印象は凄まじく、神経を揺さぶり、上皮を凍りつかせるようなものだったかもしれない。それは、もしかすると——そ

んなことは誰に分かるうか！——もしかすると、そのように深く至高の美を感受したときには、そのように深く神経を揺さぶられたときには、人間内部で何か本質的な変化が生じることさえあるのかもしれない、何らかの粒子の移動のようなこと、一瞬のうちに従来のもを従来とは違ったものへと変化させ、変哲のない鉄片を磁石に変えてしまうような、何かそうした直流電流のようなものが生じることすらあるのかもしれない И потому впечатление юноши, может быть, было горячее, потрясающее нервы, охлаждающее эпидерму; может быть, даже, – кто это знает! – может быть даже, при таких ощущениях высшей красоты, при этом сотрясении нерв, в человеке просиходит какая-нибудь внутренняя перемена, какое-нибудь передвижение частиц, какой-нибудь гальванический ток, делающий в одно мгновенье прежнее уже не прежним, кусок обыкновенного железа магнитом」。

10. 引用は、全2連16行中の第2連8行。第1連は以下の通り。

О чём ты воешь, ветер ночной?	夜の風よ、何故にお前はお泣き叫んでいるのか？…
О чём так сетуешь безумно?..	何をそんなに狂おしく嘆き悲しんでいるのか？…
Что значит странный голос твой,	ときに鈍く哀れげで、ときに荒れて騒がしい
То гулко-жалобный, то шумно?	お前の奇妙な声は何を訴えようとしているのか？
Понятным сердцу языком	お前は心にしか分からない言葉で
Твердишь о непонятной муке –	理解不能な苦悩について倦まず繰り返す——
И роешь, и взрываешь в нём	そして心の底を掘り返し、ときにはそこで
Порой неистовые звуки!..	凄まじい轟音を爆発させるのだ！…

11. 引用は、『春 Весна』(1838?)、全5連40行中の第5連7—8行目。

ВЕСНА

春

Как ни гнетёт рука судьбины,	運命の手がどれほど人々を責め苛もうと、
Как ни томит людей обман,	虚偽がどれほど人々を苦しめようと、
Как ни браздят чело морщины	皺がどれほど額に刻まれようと、
И сердце как ни полно ран,	心がどれほど傷だらけになろうと、
Каким бы строгим испытаньям	諸君がどれほど厳しい試練を
Вы ни были подчинены, –	強いられようとも——
Что устоит перед дыханьем	春の息吹、春の最初の訪いに
И первой встречею весны!	いったい何が屈せずらいられようか！

Весна... она о вас не знает,
О вас, о горе и о зле;
Бессмертьем взор её сияет
И ни морщины на челе.
Своим законам лишь послушна,
В условный час слетает к вам,
Светла, блаженно-равнодушна,
Как подобает божествам.

Цветами сыплет над землёю,
Свежа, как первая весна;
Была ль другая перед нею –
О том не ведает она:
По небу много облак бродит,
Но эти облака ей,
Она ни следу не находит
Отцветших весен бытия.

Не о былом вздыхают розы
И соловей в ночи поёт,
Благоухающие слёзы
Не о былом Аврора льёт, –
И страх кончины неизбежной
Не светит с древа ни листа:
Их жизнь, как океан безбрежный,
Вся в настоящем разлита.

Игра и жертва жизни частной!
Приди ж, отвергни чувств обман
И ринься, бодрый, самовластный,
В сей животворный океан!
Приди, струёй его эфирной
Омой страдальческую грудь –
И жизни божеско-всемирной
Хотя на миг причастен будь!
(1838?)

春… 春は諸君のことなど知りはしない、
諸君は無論、悲しみも憎しみも知りはしない。
春の眼は不死に輝き、
春の額は皺一本持たない。
春が従うはただ己が法のみ。
春は約束の季節に諸君のもとへ飛び来る。
春は、いかにも神々らしく、
光に満ち、至福に溢れ、無頓着。

春は地上に花々を振り撒く。
春は初雪のように新鮮。
いつか別な春があったとしても——
そんなことにはお構いなし。
空には数多の雲が闊歩しているが、
その雲のどれもが春のもの。
いつか咲き誇った春また春の
痕跡など何一つ目に入らない。

薔薇が溜息をつき、小夜啼鳥が夜に歌うのは、
過ぎ去りし日々を思つてのことではない。
オーロラが香しき涙を流すのは、
過ぎ去りし日々を思つてのことではない——
避け難き死の恐怖も、木から
一枚の葉すら吹き落せはしない。
森羅万象の生は、廣大無辺な大海さながら、
そのすべてが現在に注ぎ込まれているのだ。

個別の生の慰み者にして犠牲者よ！
ここへ来たりて感覚の欺瞞を吹き払い、
蛮勇を振り絞って傍若無人に
この活力溢れる大海へと跳び込むがいい！
ここに来たりて大海のエーテルの流れで
その苦悩に喘ぐ胸を洗い清めるがいい——
そして神の統べる全世界的な生と、
たとえ瞬時であれ、一つに結ばれるがいい！
(1938年?)

12. 引用は、『海上の夢 Сон на море』（1830?）、全1連22行中の17行目。

СОН НА МОРЕ

海上の夢

И море, и буря качали наш чёлн;
Я, сонный, был предан всей прихоти волн.
Две беспредельности были во мне,
И мной своевольно играли оне.
Вкруг меня, как кимвалы, звучали скалы,
Окликнулись ветры и пели валы.
Я в хаосе звуков лежал оглушён,
Но над хаосом звуков носился мой сон.
Болезненно-яркий, волшебнo-немой,
Он веял легко над гремящею тьмой.
В лучах огневицы развил он свой мир –
Земля зеленела, светился эфир,
Сады-лабиринфы, чертоги, столпы,
И сонмы кипели безмолвной толпы,
Я много узнал мне неведомых лиц,
Зрел тварей волшебных, таинственных птиц,
По высям творенья, как бог, я шагал,
И мир подо мною недвижимый сиял.
Но все грёзы насквозь, как волшебника вой,
Мне слышался грохот пучины морской,
И в тихую область видений и снов
Врывалась пена ревущих валов.
(1830?)

海と嵐が私たちの小舟を揺さぶっていた。
微睡む私は全てを波の気紛れに委ねていた。
私の中には二つの無辺があり、
それらは私を勝手気儘に弄んでいた。
周りで岩礁がシンバルのように叫び、
風が呼び交わし、大波が歌っていた。
私は喧騒の中、聾者の如く横たわっていたが
喧騒の上空では私の夢が飛び回っていた。
病的だが鮮明、魅惑的だが物言わぬ夢は、
轟音の闇の上空を軽々と飛翔し——
熱病の光の中で独自の世界を育てていた。
そこでは大地が緑なし、エーテルが輝き、
数々の迷路庭園、宮殿、円柱が、
数多の言葉なき群衆が轟めいていた。
私はそこに多くの見知らぬ人々を見分け、
幻想的動物や神秘的鳥を目にし、そして
私は神さながら、創造の高嶺を歩んでいた。
足下では不動の世界が煌めいていた。
だが夢の全てを貫き、海淵の轟音が、
魔術師の怒号さながら私の耳へと届き、
獅子吼する大波の泡が幻想と夢の領域へ
押し入ってくるのであった。
(1830年?)

13. 言及されているチュッチェフの詩作品3編を以下に紹介しよう。

① ЦИЦЕРОН

キケロ

Оратор римский говорил
Средь бурь гражданских и тревоги:
«Я поздно встал – и на дороге
Застигнут ночью Рима был!»

市民が荒れ狂い、不安塗り込める中
ローマの弁士は語っていた、
「起きるが遅かった——ために道すがら
ローマの夜に捕まってしまった！」と。

Так!.. но, прощаясь с римской славой, С Капитольийской высоты Во всём величье видел ты Закат звезды её кровавый!..	然り!…が、汝はローマの栄光に別れを告げ、 カピトリーノの丘の高みから 威風堂々と見下ろしていたのであった ローマ栄光の星の血に塗れた墜落を!…
---	---

Счастлив, кто посетил сей мир В его минуты роковые! Его призвали всеблагие Как собеседника на мир. Он их высоких зрелищ зритель, Он в их совет допущен был – И заживо, как небожитель, Из чащи их бессмертье пил! (1830?)	幸いなるかな、運命的な瞬間に この世に生を授かった者の! 彼は至善の神々によって酒宴の席へ 話し相手として呼び招かれたのだから。 彼は神々集う至高の舞台の目撃者であり、 神々の談義への参加を許されたのだから—— 生きながらにして、天上の住人の如く 神々の不死の玉杯に口をつけたのだから! (1830年?)
---	--

② НАПОЛЕОН

ナポレオン

1	1
Сын Революции, ты с матерью ужасной Отважно в бой вступил – и изнемог в борьбе... Не одолел её твой гений самовластный!.. Бой невозможный, труд напрасный!.. Ты всю её носил в самом себе...	革命の子たる汝は恐ろしき母とともに 勇躍戦場へ出陣し、戦闘に敗れ去った… 専横な天才も革命は制圧できなかった!… 実現不能の戦、無駄な骨折り!… 汝は革命を血肉と化していた…

2	2
Два демона ему служили, Две силы чудно в нём слились: В его главе – орлы парили, В его груди – змии вились... Ширококрылых вдохновений Орлиный, дерзостный полёт, И в самом буйстве дерзновений Зминой мудрости расчёт. Но освящающая сила, Непостижимая уму, Души его не озарила	彼には二人の悪魔が仕え、悪魔二人の力は 彼の体内で一つに融け合っていた。 彼の頭脳には鷲が高々と舞い上がり、 彼の胸中には蛇が蝮局を巻いていた… 大きな翼を持てる靈感の 鷲のように大胆不敵な飛翔、 天を衝く蛮行の最中の 蛇さながらに狡猾な打算。 だが、知には理解不能な 聖なる浄めの力は 彼の魂を照らさず、

И не приблизилась к нему...
Он был земной, не божий пламень,
Он гордо плыл – презритель волн, –
Но о подводный веры камень
В щепы разбился углый челн.

彼へ近づこうともしなかった…
彼は地上の火であって神の火ではない。
彼は波を侮り、傲然と船を走らせた——
だが、脆い小舟は信仰の暗礁に衝突し、
木端微塵に砕け散ったのであった。

3

И ты стоял, – перед тобой Россия!
И вещей волхв, в предчувствии борьбы,
Ты сам слова промолвил роковые:
«Да сбудутся её судьбы!..»
И не напрасно было заклинанье:
Судьбы откликнулись на голос твой!..
Но новою загадкою в изгнание
Ты возразил на отзыв роковой…

3
汝は佇んでいた——行く手に待つはロシア！
戦闘の予感の中、千里眼の魔術師さながら
汝は自ら運命の言葉を口にした、
「革命の運命の吉とならんことを！…」。
この願掛けも無駄ではなかった。
運命は汝の声に応答したのだから！…
だが、追放された汝は新たな謎かけで
不運な応答に反論したのであった…

Года прошли – и вот из ссылки тесной
На родину вернувшийся мертвец,
На берегах реки, тебе любезной,
Тревожный дух, почил ты наконец...
Но чуток сон – и по ночам, тоскуя,
Порою встав, он смотрит на Восток
И вдруг, смутясь, бежит, как бы почуя
Передраассветный ветерок.
(Начало 1850?)

月日が流れ——狭小な流刑地から
祖国へ死者となって帰還した汝、汝は
不安な霊となって愛する川の岸辺についに
永久の寝所を見出したのだった… だが
眠りは浅く——彼は夜な夜な退屈し、時折
起き出しては東方へ目を凝らす、かと思えば
突如うろたえて走り出す、あたかも薄明に
一陣の風を感じ取ったかのように。
(1850年代初め?)

③ КОЛУМБ

コロンブス

Тебе, Колумб, тебе венец!
Чертёж земной ты выполнивший смело
И довершивший наконец
Судеб неконченное дело,
Ты завесу расторг божественной рукой –
И новый мир, неведомый, нежданный,
Из беспредельности туманной
На божий свет ты вынес за собой.

汝、コロンブスよ、汝に花冠あれ！
汝は勇敢にも地上の地図を完成し、
未完のままだった運命的な事業を
ついに遣り遂げたのだから。
汝はその神のような手で帳を引き裂き——
未知の思いがけない新世界を
いつ果てるとも知れない霧の中から
神の被造世界へと引き摺り出したのだ。

Так связан, соединён от века
Союзом кровного родства
Разумный гений человека
С творящей силой естества...
Скажи заветное он слово –
И миром новым естество
Всегда откликнуться готово
На голос родственный его.
(1844)

かくして爾來、人間理性は
自然の造物主と
血縁関係で結ばれ、
一つものとなっている…
人間理性がひとたび誓いを立てれば——
血縁で結ばれたその声に
自然はいつでも新たな世界によって
応答しようと身構えている。
(1844年)

14. 言及されているチュッチェフの詩作品3編を以下に紹介しよう。

①

Слёзы людские, о слёзы людские,
Льётся вы ранней и поздней порой...
Льётся безвестные, льётся незримые,
Неистошимые, неисчислимые, –
Льётся, как льются струи дождевые
В осень глухую порою ночной.
(Октябрь? 1849)

人間の涙よ、おお、人間の涙よ、
お前は朝な夕なに流れ落ちる…
誰にも知られず、誰にも見られず、
尽きることを知らず、滾々と流れ落ちる——
雨水が幾筋も小川となって流れるように、
夜の時間に森閑とした秋へと流れ込む。
(1849年10月?)

② РУССКОЙ ЖЕНЩИНЕ

ロシア女性へ

Вдали от солнца и природы,
Вдали от света и искусства,
Вдали от жизни и любви
Мелькнут твои молодые годы,
Живые помертвеют чувства,
Мечты развеются твои...

太陽と自然から遠く離れて、
世間と芸術から遠く離れて
活力と愛から遠く離れて
汝等の青春は盛衰し、
汝等の生きた感情は死に絶え、
汝等の憧憬は雲散してしまうだろう…

И жизнь твоя пройдёт незрима,
В краю безлюдном, безмянном,
На незамеченной земле, –
Как исчезает облак дыма
На небе тусклом и туманном,

汝等の人生は密やかに過ぎ行くだらう、
住む人もなく名も知れぬ僻遠の
誰一人知らない土地で——
ちょうど煙雲が
鈍色にぼんやり霞んだ空の下

В осенней беспредельной мгле...
(1848 или 1849)

秋の果てしなき霧の中へと消え去るように…
(1848年、あるいは1849年)

③

Пошли, господь, свою отраду
Тому, кто в летний жар и зной
Как бедный нищий мимо саду
Бредёт по жёсткой мостовой –

神よ、慰めをお送りあれ、
夏の激しい炎暑の中
庭園脇の哀れな乞食さながら
硬い舗装路をよろよろ歩む男へと――

Кто смотрит вскользь через ограду
На тень деревьев, знак долин,
На недоступную прохладу
Роскошных, светлых луговин.

塀越しにちらりと
叢林の木陰を、谷間の草地を、
豊かで明るい草原の
入手し難い涼気を覗き込む男へと。

Не для него гостеприимной
Деревья сенью разрослись,
Не для него, как облак дымный,
Фонтан на воздухе повис.

木々が歓待の帷を広げたのは
その男のためではなかった。
噴水が空中に煙雲さながら散水したのも
その男のためではなかった。

Лазурный грот, как из тумана,
Напрасно взор его манит,
И пыль росистая фонтана
Главы его не осенит.

瑠璃色の主帆が、霧中からのように、
その男の視線を呼び招いても無駄なこと。
噴水の散布する水の飛沫も
彼の頭に影を与えはしない。

Пошли, господь, свою отраду
Тому, кто жизненной тропой
Как бедный нищий мимо саду
Бредёт по знойной мостовой.
(Июль 1850)

神よ、慰めをお送りあれ、
人生の行路として
庭園脇の哀れな乞食さながら
炎熱の舗装路をよろよろ歩む男へと。
(1850年7月)

15. 『二つの声』については、拙稿「B.V. コージノフ『19世紀抒情詩論(スタイルとジャンルの発展)』翻訳の試み(2)」の訳注13を参照のこと(「文化と言語」77号、172-173頁)。

16. グリンカ(Ф.Н.Глинка, 1786-1880)は、詩人、時評家、散文家でデカブリストの乱に参加した。シェヴィリョーフ(С.П.Шевырев, 1806-1864)は、文学批評家、文学史家、スラヴ主義的信念を持つ詩人。ライーチ(С.Е.Раич, 1792-1855)は、詩人、古典詩やイタ

コージノフ『19世紀ロシア抒情詩論』翻訳の試み（鈴木）

リア詩の翻訳者、教育家で、チュッチェフとレールモントフの教師でもあった。オズノビーシン(Д.П.Ознобишин, 1804-1877)は、作家、詩人、翻訳家。ノーロフ(А.С.Норов, 1795-1869)は、政治家、学者、旅行家、作家。ロッツェフ(А.Г.Ротчев, 1806-1873)は、詩人、翻訳家で、デカブリスト詩人たちに近しかった。

17. 「愛智会 Общество любомудрия」とは、1823-25年に文学と哲学の研究を主として活動したサークル。議長のおドエフスキー(В.Ф.Одоевский, 1803-1869)、書記のヴェネヴィチーノフ(Д.В.Веневитинов, 1805-1827)始め、メンバーにはキレエフスキー(И.В.Киреевский, 1806-1856)、ロジャーリン(Н.М.Рожалин, 1805-1834)、コシェリョーフ(А.И.Кошерёв, 1806-1883)、チトーフ(В.П.Титов, 1807-1891)、シェヴィリョーフ、メリグゥノーフ(Н.А.Мельгунов, 1804-1867)などがおり、主としてシェリング、フィヒテ、カントなどドイツ観念論を研究した。ヴェネヴィチーノフは、ロマン主義的傾向の詩人、翻訳家、散文家。ホミャコーフ(А.С.Хомяков, 1804-1860)は、詩人、時評家、神学者、哲学者、初期スラヴ主義の立役者の一人。
18. ピョートル・キレエフスキー(П.В.Киреевский, 1808-1856)は、イワン・キレエフスキーの弟。スヴェルベーエフ(Д.Н.Свербеев, 1799-1874)は、歴史家、外交官。
19. パヴロフ(Н.Ф.Павлов, 1803-1864)は、作家で、『名の日 Именины』、『短剣 Ятаган』、『競売 Аукцион』を収めた単行本『3つの中篇 Три повести』(1835)は、プシキン、チャアダーエフ、ベリンスキーに高評価された。ガガーリン(И.С.Гагарин, 1814-1882)は、カトリック司祭で作家。チュッチェフとはミュンヘンで知り合った。ここで言及されている書簡(原文フランス語)については、訳注 25、それに「文学遺産」97巻第1冊 510-513頁を参照のこと(Литературное наследство. Т.97, в 2-х книгах. Фёдор Иванович Тютчев. Книга первая. М., 1988, с.510-513)。
20. プシキンの引用は、「明けの明星 Денница」からのもの。同年に刊行された作品集『明けの明星 Денница』に対するこの批評は、1830年の「文学新聞」8号に無署名で掲載された(Пушкин А. С. Полное собрание сочинений в 10-ти томах, т.7. М., Издательство АН СССР, 1958, с.112.)。
21. 言及されているチュッチェフの詩作品6篇を以下に紹介しよう。

① ПРОБЛЕСК

閃光

Слышал ли в сумраке глубоком

黄昏深まる頃、君は聞いたことがあるか、

Воздушной арфы лёгкий звон,
Когда полночь, ненароком,
Дремавших струн встревожит сон?..

風のハープの軽やかな音を、
微睡んでいた弦の眠りを真夜中に
なんとはなしに掻き乱す音を?…

То потрясающие звуки,
То замирающие вдруг...
Как бы последний ропот муки,
В них отозвавшись, потух!

その音はときに心身を揺さぶり、
ときに忽然と鳴り止んでしまう… さながら
その音の中で苦悩の最後の眩しが木霊し、
掻き消えてしまったかのようなだった!

Дыханье каждое Зефира
Взрывает скорбь в её струнах...
Ты скажешь: ангельская лира
Грустит, в пыли, по небесах!

ゼピュロスの一吹き一吹きが
悲しみの弦を激しく掻き鳴らす…
君は言うだろう、天使の堅琴が塵芥に塗れ、
四方の空を恋しがっているのだ!と。

О, как тогда с земного круга
Душой к бессмертному летим!
Минувшее, как призрак друга,
Прижать к груди своей хотим.

おお、そのとき我等が心は地上世界から
不死の世界を目指して飛翔する!
そのとき我等は過去を、友の幻影のように、
胸にぎゅっと抱き締めようとする。

Как верим верою живою,
Как сердцу радостно, светло!
Как бы эфирною струёю
По жилам небо протекло!

そのとき我等はどれほど生き生きと強く信じ、
我等が心はどれほど楽しく、明るいことか!
さながら空がエーテルの細流となって
血管という血管を走り抜けたかのよう!

Но, ах! не нам его судили;
Мы в небе скоро устаём, –
И не дано ничтожной пыли
Дышать божественным огнём.

だが、嗚呼! 天空は我等が領分にあらず。
天空にあればすぐに疲れる我等——
取るに足りない塵芥の我等、
神の火に息吹くなど許されざること。

Едва усилием минутным
Прервём на час волшебный сон
И взором трепетным и смутным,
Привстав, окинем небосклон, –

ひとときの尽力で
麗しき眠りをしばし打ち破り、
身を起こし、不安に戦き震える目で
天空を睨め回す間もあらばこそ——

И отягчённую главою,
Одним лучом ослеплены,

我等、重くなった頭と
一条の光に分別を奪われ、

Вновь упадем не к покою,
Но в утомительные сны.
(Осень 1825?)

再び落下する、安らかな眠りではなく、
うんざりするような眠りの中へと。
(1825年秋?)

② ВЕСЕННЯЯ ГРОЗА

春の雷雨

Люблю грозу в начале мая,
Когда весенний, первый гром,
Как бы резвяся и играя,
Грохочет в небе голубом.

愛すべきは五月初めの雷雨、
春初めての雷がはしゃぎ
遊び回るかのように
青空に轟き渡るそのとき。

Гремят раскаты молодые,
Вот дождик брызнул, пыль летит,
Повисли перлы дождевые,
И солнце нити золотит.

若い雷鳴が唸りをあげるかと思うや
雨が降りしきり、埃が飛び交い、
雨の真珠が蜘蛛の糸に垂れ下がり、
陽光は蜘蛛の糸を黄金に染めている。

С горы бежит поток проворный,
В лесу не молкнет птичий гам,
И гам лесной, и шум нагорный –
Всё вторит весело громам.

山からは早瀬が迸り流れ、
森では鳥たちの歌声止まず、
森の喧騒、山のざわめき――
全てが楽しげに雷鳴と和している。

Ты скажешь: ветреная Геба,
Кормя Зевесова орла,
Громокипящий кубок с неба,
Смесь, на землю пролила.
(1828? и начало 1850-х гг.)

君は言うだろう、腰軽なヘーペーが
ゼウスの鷲に餌をやろうとして
玉杯から激しく泡立つ酒を、笑いながら
空から地上へ注ぎ零したのだ、と。
(1828年?と1850年代初頭)

③ МОГИЛА НАПОЛЕОНА

ナポレオンの墓

Душой весны природа ожила,
И блещет всё в торжественном покое:
Лазурь небес, и море голубое,
И дивная гробница, и скала!
Древа кругом покрылись новым цветом,
И тени их, средь общей тишины,
Чуть зыблются дыханием волны

然が春の心を蘇らせ、その全身を
晴れやかな平安の中に煌めかせている。
瑠璃色の空に青い海原、
見事な霊廟、それに岩壁！
木々はすっかり新色に覆い尽くされ、
その影は、四方に静寂鎮る中、
春に暖められた大理石の上で、

На мраморе, весною разогретом...

波の息吹きながら微かに揺れている…

Ещё гремит твоих побед

汝の数多ある勝利の反響はいまだ

Отзывный гул в колеблющемся мире...

激動の世界に轟き渡っている…

.....
.....

.....
.....

И ум людей твоею тенью полн,
А тень твоя, скитаясь в крае диком,
Чужда всему, внимая шуму волн,
И тешится морских пернатых криком.
(1828?)

人々の脳裏は汝の幻影に溢れているが、
汝の幻影は、未開の辺境をさまよひ、
森羅万象と縁を切り、潮騒に耳を翫て、
泡立つ海の咆哮に心安んじている。
(1828年?)

④ SILENTIUM !

シレンチウム(沈黙)!

Молчи, скрывайся и таи
И чувства и мечты свои –
Пускай в душевной глубине
Встают и заходят оне
Безмолвно, как звёзды в ночи, –
Любуйся ими – и молчи.

黙すがいい、身を潜め、秘するがいい、
感情という感情、夢という夢を——
感情も夢も心の奥底で、
夜の星のように言葉なく、
起居させておくがいい——
感情と夢に見惚れ——そして黙すがいい。

Как сердцу высказать себя?
Другому как понять тебя?
Поймёт ли он, чем живёшь?
Мысль изречённая есть ложь.
Взрывая, возмутишь ключи, –
Питайся ими – и молчи.

心にどうして言いたいことが言えるだろう?
他人にどうして君が理解できようか?
他人に君の生きがいが理解し得ようか?
言葉にされた思想は嘘偽りである。
泉を掘り起しては掻き混ぜるがいい——
それらの泉を糧とし——そして黙すがいい。

Лишь жить в себе самом умеи –
Есть целый мир в душе твоей
Таинственно-волшебных дум;
Их оглушит наружный шум;
Дневные разгонят лучи, –
Внимай их пенью – и молчи!..
(1830?)

ただ自分の中だけで生きる術を学ぶがいい——
君の心には神秘的にして魅惑的な考えの
大いなる世界を潜んでいるが、
それらの思いは外界の喧騒に響かれ、
昼の光に蹴散らされよう——それらの思いの
歌声に耳を翫て——そして黙すがいい!…
(1830年?)

⑤ ЛЕТНИЙ ВЕЧЕР

夏の宵

Уж солнца раскалённый шар
С главы своей земля скатилась,
И мирный вечера пожар
Волна морская поглотила.

灼熱の日輪を早や
大地がその頭から転げ落とし、
宵の平和な暑さを
海の波が呑み込んでしまった。

Уж звёзды светлые взошли
И тяготеющий над нами
Небесный свод приподняли
Своими влажными главами.

すでに明るい星々が昇り、
我等が頭上に押し掛かる天空を
その濡れそぼつ頭で
ほんの少し持ち上げた。

Река воздушная полней
Течёт меж небом и землёю,
Грудь дышит легче и вольней,
Освобождённая от зною.

天の川はますます滔々と
天と地の間を流れ行き、
胸は炎暑を逃れ、一段と軽やかに
一段と自由に息衝いている。

И сладкий трепет, как струя,
По жилам пробежал природы,
Как бы горячих ног ея
Коснулись ключевые воды.
(1828?)

甘やかな戦慄が小川さながら
自然の血管という血管を走り抜けた。
それはまるで自然の火照った足に
泉の湧水が触れたかのようなだった。
(1828年?)

⑥ ВИДЕНИЕ

幻想

Есть некий час, в ночи, всемирного молчанья,
И в оный час явлений и чудес
Живая колесница мироздания
Открыто катится в святилище небес.

夜に全世界の沈黙する時間がある。
現象と奇跡のその時間、
世界創造の元氣な馬車が
天上の聖堂を我が物顔で闊歩する。

Тогда густеет ночь, как хаос на водах,
Беспамятство, как Атлас, давит сушу...
Лишь Музы девственную душу
В пророческих тревожат боги снах!
(Первая половина 1929?)

やがて夜が水面のカオスさながら更けゆき
人事不省がアトラスさながら陸地を圧する…
ムーサの無垢な魂を
数多の予知夢で掻き乱すは、ただ神々のみ!
(1829年前半?)

22. 『夢また夢 Сны』と『棺は早や墓穴へと降ろされた… И гроб опущен уж в могилу…』をここで紹介しておこう。なお『夜の風よ…』については訳注 10 を、『海上の夢』については訳注 12 を、『シレンチウム』については訳注 21 を参照願いたい。

① СНЫ

夢また夢

Как океан объёмлет шар земной,
Земная жизнь кругом объята снами...
Настанет ночь – и звучными волнами
 Стихия бьёт о берег свой.

地球が大洋に抱かれているように
地上の生は夢また夢に抱かれている…
夜が訪れる——すると自然はその岸辺へ
どよめく波また波を打ち寄せる。

То глас её: он нудит нас и просит...
Уж в пристани волшебный ожил чёлн;
Прилив растёт и быстро нас уносит
 В неизмеримость тётных волн.

時に自然の声が響き、我等に強く懇願する…
波止場では早や麗しき小舟が張切っている。
潮が満ち、我等を瞬刻間に連れ去る、
暗い波間の無限の彼方へと。

Небесный свод, горящий славой звёздной,
Таинственно глядит из глубины, –
И мы плывём, пылающе бездной
 Со всех сторон окружены.
(Начало 1830?)

星の讃歌に煌めき立つ天空は
遥かな彼方からそっと視線を投げ掛ける——
そして我等は船を進める、燃える奈落に
四圍を取り囲まれながら。
(1830年初頭?)

②

И гроб опущен уж в могилу
И всё столпилось вокруг...
Толкуются, дышат через силу,
 Спирает грудь тлетворный дух...

棺は早や墓穴に降ろされた、だがまだ
周囲には群衆が薙き合っていた…
群衆は押し合い、どうにか息を衝きながら、
腐臭に胸を詰まらせている…

И над могилою раскрытой,
В возглавии, где гроб стоит,
Учёный пастор сановитый
 Речь погребальную гласит.

まだ土で覆い隠されていない
棺の納められた墓穴を見下ろしながら、
学識ある高位の牧師が率先して
弔いの言葉を捧げている。

Вещает брэнность человекую,
Грехопаденье, кровь Христа...
И мною, пристойной речью

牧師は語る、人生の無常について、
現在について、キリストの血について…
その賢明にして時宜を得た弔辞は

Толпа различно занята...	群衆それぞれの胸を打つ…
А небо так нетленно-чисто,	空はどこまでも晴れわたり、
Так беспредельно над землёй...	果てなく高く頭上に広がっている…
И птицы реют голосисто	そして鳥たちは囀り高らかに
В воздушной бездне голубой...	深淵紺碧な大気を飛び交っている…
(1835?)	(1835年?)

23. シシコーフ(A.C.Шишиков, 1754-1841)は、「ロシア語愛好者談話会」を主宰し、カラムジンの方向性に沿いながら新たなロシア標準語を模索する「アルザマス会」と激しい論争を展開した。ロシア標準語の完成者とも言えるプウシキンにとって、アルカイズムを主張してやまないシシコーフは仇敵であった。

24. ガガーリンについては訳注 19 を参照のこと。クラエフスキー(A.A.Краевский, 1810-1889)は、出版者、編集者、ジャーナリストで、「祖国雑記」誌の編集者として有名。プレトニョーフ(П.А.Плетнев, 1791-1865)は、詩人、批評家。サマーリン(Ю.Ф.Самарин, 1819-1876)は、スラヴ派の哲学者、時評家。

25. 引用は、『1837年1月29日 29-ое января 1837』からのもので、「皇帝殺し」は第1連8行目、「神々の生ける楽器」は第2連7行目、「初恋」は第3連7行目に使われている。

Из чьей руки свинец смертельный	詩人の心臓を射抜いた致命の鉛弾は
Позту сердце растерзал?	いったい誰の手から放たれたのか?
Кто сей божественный фиал	この神の玉杯を、土器のように
Разрушил, как сосуд скудельный?	砕き割ったのはいったい何者か?
Будь прав или виновен он	我等が地上の正義に照らしてその者が
Пред нашей правдою землею,	たとえ正しかろうと悪かろうとも、
Навек он вышею рукою	その者には神の手で未来永劫変わることなき
В «царевубийцы» заклеимён.	「皇帝殺し」の烙印が刻み込まれたのだ。

Но ты, в безвременную тьму	しかし、汝、現世から突如
Вдруг поглощённая со света,	夭折の闇へと呑み込まれてしまった汝、
Мир, мир тебе, о тень поэта,	おお、詩人の亡霊よ、汝に平和あれ、
Мир светлый праху твоему!..	汝の遺灰に輝ける平和あれ!…
Назло людскому суесловью	世間の無駄口を嘲笑うかのように、
Велик и свят был жребий твой!..	汝の運命の何と偉大で神聖だったことか!…

Ты был богов орган живой, 汝は神々の生ける楽器だったが、血管には
Но с кровью в жилах... знойной кровью. 血が… 灼熱の血が流れていたのがあった。

И сею кровью благородной 汝はその高潔な血によって
Ты жажду чести утолил – 名誉への渴望を癒していた——さればこそ
И осенённый опочил 汝は、国民の悲しみの旗に包まれて
Хоругвью горести народной. 来世へと旅立ったのだ。
Вражду твою пусть Тот рассудит, 汝の敵意の裁きはあの方の手に、
Кто слышит пролитую кровь... 流血の真相を知る神の手に委ねよう…
Тебя ж, как первую любовь, ロシア人の心は汝のことを、初恋のように
России сердце не забудет!.. いつまでもずっと覚えていることだろう！…
(Май – июль 1837?) (1837年5～7月?)

26. この書簡については本文中で前述されている(訳注 19も参照のこと)。[]は訳者の補足。ついでながら原文は以下の通りである。

«J'aime à faire honneur à la nature-même de l'esprit russe de cet éloignement pour la rhétorique, [cette peste ou plutôt ce péché originel de l'intelligence française.] C'est là ce qui met *Пушкин* si fort au-dessus de tous les poètes français contemporains... » (Литературное наследство. Т.97, в 2-х книгах. Фёдор Иванович Тютчев. Книга первая. М., 1988, с.510 / 露訳は 512 頁)。

27. この長篇とはアンドレイ・ビートフ(А.Г.Битов, 1937-)の『プウシキン館 Пушкинский дом』のこと。『プウシキン館』は、1964年に書き始められ、1971年に完成した。ポストモダンの傑作とされるこの長篇は、単行本としては1978年に初めてアメリカで出版され、ソ連で出版されたのはやっと1989年のこと(雑誌には1987年に発表されていた)。「プロローグ+3部」構成で、プウシキンとチュツチェフ関係箇所があるのは第2部の付録(主人公オドエフツェフの論文の再話)。『狂気 Безумие』については本文で後述されるので、ここでは『フェートへ А.А.Фетю』(1862年4月14日)を紹介しておこう。

Тебе сердечный мой поклон 君へ心衷心からの敬意を贈ろう。そして
И мой, каков ни есть, портрет, 我が肖像画に、それが如何なる代物にせよ、
И пусть, сочувственный поэт, 心優しき詩人よ、君へ告げさせよう、
Тебе хоть молча скажет он, たとえ沈黙の言葉によってであるにしても、
Как дорог был мне твой привет, 君の挨拶が僕にはどれほど大切だったかを、
Как им в душе я умилен. 君の挨拶が僕の心をどれほど和ませたかを。

28. 引用は、『おお、炯眼なる我が魂よ… О вещая душа моя…』(1855)、全3連12行中の第1連1行目と第2連3～4行目。[]は訳者の補足。

О вещая душа моя,	おお、炯眼なる我が魂よ、
О сердце, полное тревоги –	おお、不安に溺れる我が心よ——
О, как ты бьешься на пороге	二つの存在の狭間にあるかのように、
Как бы двойного бытия!..	お前の鼓動の、おお、何と激しいことか!…

Так ты – жилища двух миров,	たとえばお前は——二つの世界の住処、
Твой день – болезненный и страстный,	お前の昼は——病的にして情熱的、
Твой сон – пророчески-неясный,	お前の夢は——予言的にして曖昧、
Как откровение духов…	まるで精霊たちの啓示のように…

Пускай страдальческую грудь	たとえどれほど痛ましき胸を
Волнуют страсти роковые –	宿命的な情熱が焦がそうと——我が魂は、
Душа готова, как Мария,	聖母マリアのように、キリストの足へ縋り、
К ногам Христа навек прильнуть.	永久に離さぬ覚悟ができています。
(1855)	(1855年)

29. 引用は、『幻想 Видение』(1829?)、全2連8行中の第2連2～4行目。[]は訳者の補足。『幻想』については訳注21参照。

30. 引用は、『炎は赤々と、炎はめらめらと燃え盛る… Пламя рдеет, пламя пышет,..』(1855)、全2連16行中の第1連5～8行目。

Пламя рдеет, пламя пышет,	炎は赤々と、炎はめらめらと燃え盛り、
Искры брызжут и летят,	火花が弾け飛んでいるが、
А на них прохладой дышит	火花の上には暗い庭園が
Из-за речки тёмный сад.	小川の涼気に息衝いている。
Сумрак туг, там жар и крики,	此方には黄昏、彼方には熱気と叫喚。
Я брожу как бы во сне, –	私は夢の中さながらに彷徨い歩く——
Лишь одно я живо чувю:	ひしと感じるはただ一つ、君が私とともにあり
Ты со мной и вся во мне.	君のすべてが私の中にあるということのみ。

Треск за треском, дым за дымом,	爆ぜる音また音、もうもうたる煙また煙、
Трубы голые торчат,	によつきり突き出た剥き出しの煙突また煙突。

А в покое нерушимом
Листья веют и шуршат.
Я, дыханьем их обвеяв,
Страстный говор твой люблю...
Слава богу, я с тобою,
А с тобой мне – как в раю.
(10 июля 1855)

破るもの何一つないひっそりした静寂の中で
葉たちが風に身を躍らせ、お喋りしている。
私は大好き、葉々の吐息に包まれながら、
お前の情熱的な話に耳を傾けるのが…
幸いなるかな、君は私の傍らにいる。
君とともにあれば——私は天国にいるも同然。
(1855年7月10日)

31. 引用は、『ロストプチーナ伯爵夫人へ(彼女の書簡への返信) Графине Е.П.Ростпчиной
(в ответ на её письмо)』(1850)、全8連32行中の第2連4行。

Как под сугробом снежным лени,
Как околдованный зимой,
Каким-то сном усопшей тени
Я спал, зарытый, но живой!

雪の吹き溜まり辺りに漂う気怠さのように、
冬に魔法をかけられたかのように、
私は、生きながらに葬られ、
いまは亡き人の夢を見ていた！

И вот, я чувю, надо мною,
Не наяву и не во сне,
Как бы повеяло весной,
Как бы запело о весне...

するとふと、私は頭上に感じる、
夢ともつかず現ともつかず、
春の息吹が漂っているかのような気配を、
春の歌が歌い出されたかのような気配を…

Знакомый голос... голос чудный...
То лирный звук, то женский вздох...
Но я, ленивец беспробудный,
Я вдруг откликнуться не мог...

聞き知った声を… 奇跡のような声を…
あるときは豎琴の響を、あるときは溜息を…
けれど私は札付きの怠け者、感じるものへ
不意に応えられなくなってしまった…

Я спал в оковах тяжкой лени,
Под осьмимесячной зимой,
Как дремлют праведные тени
Во мгле стигийской роковой.

私は眠っていた、重い倦怠の枷をはめられ
八か月にわたる冬を耐え忍びながら、
まるで不吉なステュクスの暗闇の中で
敬虔な死者たちが微睡むように。

Но этот сон полумогильный
Как надо мной ни тяготел,
Он сам же, чародей всеильный,
Ко мне на помощь подоспел.

だが、この半冥界的な夢が私の頭上に
どれほど重くのしかかろうと、
万能の魔術師たる夢が私を訪れたのは、
私を救済するために他ならなかった。

Приязни давней выраженья
Их для меня он уловил –
И в музыкальные виденья
Знакомый голос воплотил...

夢は私のために、死者たちの遠い日の
友誼溢れる面影を捕まえてくれたのだ——
そして音楽的な幻想の中に
見知った声を再現してくれたのである…

Вот вижу я, как бы сквозь дымки,
Волшебный сад, волшебный дом –
И в замке феи-Нелюдимки
Вдруг очутились мы вдвоём!..

と、ほら、目に浮かぶ、煙を透かすかのように
魅惑的な庭園が、魅惑的な邸宅が——
そして、人嫌いな妖精の城に突如
私たち二人して姿を現したのだった！…

Вдвоём! – И песнь её звучала,
И от заветного крыльца
Гнала и буйного нахала,
Гнала и пошлого льстеца.
(1850)

二人して！——やがて妖精の歌が響き渡り、
隠し戸から追い払ったのであった、
乱暴狼藉な破廉恥漢も、
そして卑劣な太鼓持ちも。
(1850年)

32. 『フェートへ А.А.Фету』については訳注 27 を参照のこと。ただし、ここでコージノフが念頭においているのは、彼が本文中で引用している『ある者たちは自然によって… Иным достался от природы...』のことであろう。前者に「聞く」というモチーフはないからである。そもそも 1862 年 4 月 14 日にフェートへ送付されたこれら二つの作品は、1868 年に初めて発表されたときには一つの作品であったから、コージノフはそうした事情を踏まえ、双方をまとめて『フェートへ』と呼んでいると考えられる。ちなみに、この二作品は(あるいは一作品は)、チュツチェフを世界史上最大の詩人の一人とみなす(訳注 6 参照)フェートが 1862 年に書いた『チュツチェフへ Ф.И.Тютчеву』(「我が敬愛すべき詩人」と始まる第 1 連ではチュツチェフの肖像画が所望されている)に対する返歌である。なお、『ある者たちは自然によって… Иным достался от природы...』第 1 連は、本文で後述されるチュツチェフの『狂気 Безумие』(1830?)の最終 2 連に対する応答となっている。

33. 引用は、『これら貧しき村々… Эти бедные селенья...』(1855)、全 3 連 12 行中の第 2 連 3~4 行目。[]は訳者の補足。

Эти бедные селенья,
Эта скудная природа –
Край родной долготерпенья,
Край ты русского народа!

これら貧しき村々、
この貧相な自然——お前こそは
辛酸を耐えに耐えてきた祖国だ、
ロシアの民の祖国なのだ！

Не поймёт и не заметит
Гордый взор иноплеменный,
Что сквозит и тайно светит
В наготе твоей смиренной.

異国の尊大な目には、
決して分かるまい、気がつくまい、
お前の従順な裸身を貫き、
密やかに輝くものの何たるかを。

Удручённый ношей крестной,
Всю тебя, земля родная,
В рабском виде Царь небесный
Исходил, благословляя.

十字架の重荷を背負い、
奴隷に身をやつした天帝は、
祖国の大地よ、お前を祝福しつつ、
お前を隈なく歩き回ったのだ。

(13 августа 1855)

(1855年8月13日)

34. 引用は、『聖なる夜が地平線上に姿を見せ… Святая ночь на небосклон взошла…』
(1848、1850)、全2連16行目中の第2連7～8行目。

Святая ночь на небосклоне взошла,
И день отрадней, день любезней,
Как золотой покров она свила,
Покров, накинутый над бездной.
И, как виденье, внешний мир ушёл…
И человек, как сирота бездомный,
Стоит теперь и немощен и гол,
Лицом к лицу пред пропастию тёмной.

聖なる夜が地平線上に姿を見せ、
喜ばしい一日、愛すべき一日を巻き取った、
黄金のベールを、奈落の上に覆い被された
ベールを巻き取るかのように。
外界は幻のように消え去った…
今や人間は、家なき孤児のように、
弱々しく裸身を晒して佇み、
暗い深遠と顔を突き合わせている。

На самого себя покинут он –
Упразднен ум, и мысль осиротела –
В душе своей, как в бездне, погружён,
И нет извне опоры, ни предела…
И чудится давно минувшим сном
Ему теперь всё светлое, живое…
И в чуждом, неразгаданном ночном
Он узнает наследье родовое.
(Между 1848 и мартом 1850)

人間は孤独の中に見捨てられ——
頭の回転は停止し、思考は孤立無援——
人間は奈落のような己が心へ沈潜する。
外界からの支柱なければ枠組みもない…
今や明るく生氣あるものすべてが
遠い昔の夢のように感じられる…
やがて彼は、無縁にして不可解な夜界の中に
父祖伝来の遺産をしかと見分けるであろう。
(1848年～1850年3月)

35. 引用は、『流れは嵩を増し、色を鈍らせ… Поток сгустился и тускнеет…』(1830年代初頭)、全2連16行中の第2連5～8行目。

Поток сгустился и тускнеет, И прячется под твёрдым льдом, И гаснет цвет и звук немеет В оцепененье ледяном, – Лишь жизнь бессмертную ключа Сковать всеильный хлад не может: Она всё льётся – и, журча, Молчанье мёртвое тревожит.	流れは嵩を増し、色を鈍らせ、 硬い氷の下に隠れてしまう。 虚脱した氷の中では 色は消え、音は途絶えてしまう—— 泉から湧き出る不死の生だけは 万能な冷気にも拘束できない。泉から 湧き出る不死の生は流れて止まるを知らず、 さらさらと音を立て、死の沈黙を脅かす。
--	--

Так и в груди осиротелой, Убитой хладом бытия, Не льётся юности весёлой, Не блещет резвая струя, – Но подо льдистою корой Ещё есть жизнь, ещё есть ропот – И внятно слышится порой Ключа таинственного шепот! (Начало 1830-х гг.)	存在の冷気に打ち据えられた 孤独な胸中もまた同じこと。 そこでは澁刺たる青春が漂うこともなく、 快活な流れが煌めくこともない—— だが、氷の外殻の下にも なお生があり、なおせせらぎがある—— そしてときには歴然と聞き取れるのだ、 密やかに秘められた泉の囁き声を！ (1830年代初め)
---	--

36. 引用は、『閃光 Проблеск』（1825?）、全8連32行中の第5連3～4行目。『閃光』については訳注21参照。

37. 引用は、『不眠 Бессонница』（1829年?）、全6連24行中の第2連2～4行目。[]は訳者の補足。

Часов однообразный бой, Томительная ночи повесть! Язык для всех равно чужой И внятный каждому, как совесть!	時間たちの単調な戦い、 夜の胸締め付けるような物語！ 誰一人理解はできないが、 誰もが良心さながら聞き取る言葉！
--	---

Кто без тоски внимал из нас, Среди всемирного молчанья, Глухие времени стенанья, Пророчески-прощальный глас?	我等の誰が杞憂なく聴き得たろうか、 全世界が沈黙する中で 時間のくぐもった呻き声を、 予言的な暇乞いの声を？
---	---

Нам мнится: мир осиротелый
Неотразимый Рок настиг –
И мы, в борьбе, природой целой,
Покинуты на нас самих.

我等は思う、孤児となった世界が
打ち勝ち難い宿命に襲われ——
我等はその戦場で自然の全てに見捨てられ、
一人ぼっちになってしまったのだ、と。

И наша жизнь стоит пред нами,
Как призрак на краю земли,
И с нашим веком и друзьями
Бледнеет в сумрачной дали...

我等が人生は我等が眼前にある、
さながら地の果ての幻影のように、
そして我等が時代、我等が同胞とともに
黄昏行く彼方で青褪めている...

И новое, младое племя
Меж тем на солнце расцвело,
А нас, друзья, и наше время
Давно забвеньем занесло!

だがまた若々しい新世代が
陽光を浴びながら絶頂を謳歌している。
同胞よ、我等は、我等が時代はとうに
忘却の奈落へ埋葬されてしまったのだ！

Лишь изредка, обряд печальный
Свершая в полуночный час,
Металла голос погребальный
Порой оплакивает нас!
(1829?)

ただごくごく稀に
ずしりとした吊いの声が、
夜半に悲しい儀式を執り行いながら、
我等が死を悼んで泣いてくれるのみ！
(1829年?)

38. 引用は、『アー・エン・エム(ムウラヴィヨーフ)へ A. Н. М(уравьёву)』(13 декабря 1821)、全3連23行(1連8行、2連6行、3連9行)中の第1連2~8行目。[]は訳者の補足。題名の頭文字は、アンドレイ・ニコラエヴィチ・ムウラヴィヨーフ(Андрей Николаевич Муравьёв, 1806-1874)を指すとされているが、題名にもかかわらず、彼に捧げられたものかどうかは疑わしいという。

Нет веры к вымыслам чудесным,
Рассудок всё опустошил
И, покорив законам тесным
И воздух, и моря, и сушу,
Как пленников – их обнажил,
Ту жизнь до дна он иссушил,
Что в дерево вливала душу,
Давала тело бестелесным!..

奇跡の造化への信仰はなく
理性は万物を蹂躪し、
あれこれの狭隘な法則に
大気も海も陸地も奴隷さながらに
服従させ、丸裸にしてしまった。
生を髓まで乾涸びさせてしまったのだ、
木々に魂を注ぎ込み、
霊に肉を与えてきたあの生を！

Где вы, о древние народы!
Ваш мир был храмом всех богов,
Вы книгу Матери-природы
Читали ясно, без очков!..
Нет, мы не древние народы!
Наш век, о други, не таков.

О раб учёной суеты
И скованный своей наукой!
Напрасно, критик, гонишь ты
Их златокрылые мечты;
Поверь – сам опыт в том порукой, –
Чертог волшебный добрых фей
И в сновиденье – веселей,
Чем наяву – томиться скукой
В убогой хижине твоей!..
(13 декабря 1821)

古代民たちよ、汝等は何処にありや！
汝等の世界は神という神の集う神殿であった。
汝等は母なる自然の書物を
眼鏡もかけずに正確に読み取っていた！…
だが、我等は古代民にあらず！ もはや
我等が時代は、同胞よ、昔とは別物なのだ。

おお奴隷よ、学術的な気苦労に追い回され、
自らの学問に釘付けされた者よ！
どんなに君が古代民の悠々と飛翔する夢を
批評によって蹴散らそうとしても無駄なこと。
信じるがいい——経験こそはその保証——
夢に見る優しい妖精たちの魅惑の宮殿こそは、
君の粗末なあばら家で
無聊に苦しむ他ない現実よりも
ずっとずっと快適なのだということを！…
(1821年12月13日)